

アンコール遺跡整備公団 インターンシップ報告



2010年度

金沢大学人間社会学域
国際学類



アンコール遺跡整備公団本部通用口



初日の打ち合わせと業務の説明会



公団側責任者のハン・プー副総裁



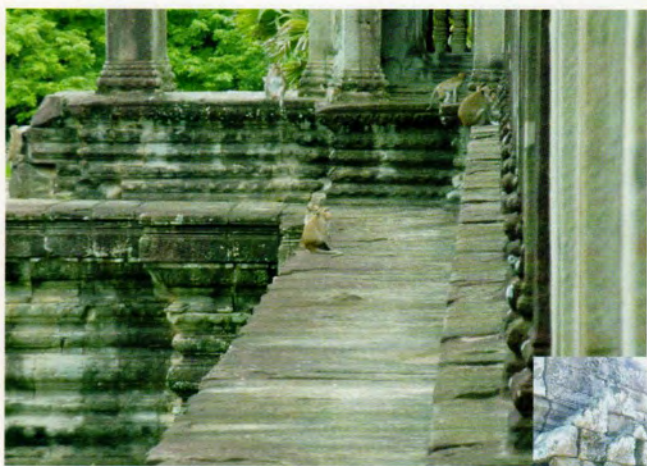
水試料の屋内分析作業



業務への出発前



プノンクロム（大気汚染濃度調査地点）からトンレサップ湖をのぞむ



寺院のサル



崩れた寺院



ルン・タ=エク・エコヴィレッジ



スーパーマーケット



アモックレストランの「アモックセット」



お別れ会

目 次

ご挨拶	金沢大学学長	中村 信一	1
学類長挨拶	金沢大学人間社会学域国際学類長	鹿島 正裕	2
アンコール遺跡整備公団とインターンシップ実施までの経緯			
	金沢大学環日本海域環境研究センター	塚脇 真二	3
2010 年国際学類アンコール遺跡整備公団学生インターンシップ実施の概要			4
業務報告			7
自由エッセー			17
あとがき	金沢大学人間社会学域国際学類	粕谷 雄一	44

ご 挨 拶

「カンボジア・インターンシップ（就業体験）」は、金沢大学が初めて組織的に取り組み実施した海外インターンシップ事業であります。国内でのインターンシップはもはや当たり前のことになっておりますが、海外インターンシップを組織的に実施している大学はまだ珍しいので、その成果や教訓をご報告させていただきます。

本学とカンボジアとの交流では、環日本海域環境研究センターの塚脇信二教授を中心に長年研究協力が続けられ、その実績に基づき、私自身本年2月に訪問してアンコール遺跡整備公団およびカンボジア工科大学と本学の交流協定を締結して参りました。今回、学生インターンをアンコール遺跡整備公団で受け入れていただいたのは、それによって可能となったものです。

このインターンシップは、人間社会学域の国際学類が中心となって参加者を募集し、国際学類生6名に他学類・大学院生6名の計12名を、平成22年9月4日から19日までの半月にわたって派遣することができました。その実施にあたっては、塚脇教授がアンコール遺跡整備公団と綿密に打ち合わせ、学生の業務、宿舎や交通の手配をしてくださる一方、国際学類の粕谷雄一教授・深澤のぞみ教授方が学内外での準備や現地で対応をされ、全員無事に意義ある就業体験を済ませることができたのかっております。三人の先生方をはじめ関係された皆様のご苦勞に感謝いたします。

皆様方に加え一番感謝を申し上げなければならないのは、アンコール遺跡整備公団であります。外国人学生を多数、2週間も受け入れて、無料で就業体験をさせてくださる国や団体はめったにあるものではありません。しかもアンコール遺跡は、先ほど申したように、私自身視察して参りましたが、あまたある世界遺産のなかでも白眉の一つと言い得るものではないかと思えます。学生たちは、それを無料（アンコール遺跡入場料20米ドル）で見学し、外国で生活し、世界遺産の整備業務の一端を手伝い、教えてもらうという貴重な経験をさせていただきました。

今回のインターンシップが、学生に“人生とは？”を改めて考えさせるキッカケ・感動を与えたものと確信しております。

金沢大学学長 中村 信一

学類長挨拶

国際学類は、グローバル化が進む現代社会で、国内外で重要になってきている国際関係業務に対応できる人材を養成することを目的に、3年前に本学で新設されました。そこでは、海外での短期留学や語学研修を奨励することに加えて、インターンシップも選択可能にしようと思いました。

しかし、先進国の都会で半月も暮らすと多額の費用がかかりますし、外国人学生を2週間も受け入れて就業体験させてくれる団体など簡単には見つかりません。それで海外留学・インターンシップを斡旋する民間業者を学生に紹介して、個人で行ってもらうしかないかと思っておりましたら、塚脇真二教授が、アンコール遺跡整備公団にインターン学生の受入れを依頼してみようご提案くださいました。そして昨年10月、教授が科研費で招待された公団のプー副総裁が本学を訪問され、学長や長野勇副学長らに会われた際、学生向けに「国際学セミナー」の一環として講演していただくと共に、国際学類生のインターンシップを受け入れていただくことに内諾を得ることができました。

そのご、2月に学長や長野副学長らがカンボジアを訪問された際、私と粕谷雄一教授も一部同行させていただいて、アンコール遺跡および整備公団、シエムリアップ市等を訪問し、インターンシップ事業についての合意を得たのです。そしてインターンシップ全般の責任者深澤のぞみ教授らに手続き面でご努力いただき、この海外インターンシップに関しては塚脇・粕谷教授によくご準備いただいて、ようやく実施に漕ぎ着けました。

9月には私もカンボジア研究でいただいた旅費で1週間ほど現地を再訪し、インターンシップの実態を視察することができました。公団の職員多数の親切なご指導と、塚脇・粕谷両先生の側面支援によって、12名もの学生が、皆元気でまた楽しみながら就業体験をさせてもらっていることが見て取れ、たいへんありがたく、またうれしく思いました。金沢大学が文部科学省から補助金をいただいて開始した人材育成目標検討支援事業により、インターン生一人当たり5万円の補助金も支給することができたので、学生諸君は小さな費用で大きな成果を得られたものと信じています。参加学生にグループ別の業務報告と個人的エッセーを書いてもらいました。多くの皆様にお読みいただきたいと存じます。

金沢大学人間社会学域国際学類長 鹿島 正裕

アンコール遺跡整備公団とインターンシップ実施までの経緯

アンコールワット寺院で有名なカンボジアのアンコール世界遺産公園は、1万人以上もの住民が世界遺産の中でそのままの生活をいとなむ文化遺産としても知られる。遺跡の修復や維持管理のみならず、地域住民の暮らしの保障や観光産業の管理、さらには遺産公園内外の自然環境の保全をも目的に1995年に設立されたのがアンコール遺跡整備公団（通称：アプサラ公団）である。事務部を含め14の部門からなり、約550名の常勤職員をかかえるこの公団はカンボジア王国最大の公団でもある。

アプサラ公団と筆者とのかかわりは、公団がまだ設立準備段階にあった1994年にさかのぼる。初代総裁となるヴァン・モリヴァン氏をこのころ実施していたアンコールワット西参道の地下地質構造の調査現場へ案内したのが始まりだ。設立後の公団は2度の改組とともに規模を拡大し業務内容を多様化させながら現在に至っている。一方の筆者もカンボジアの自然環境やアンコール世界遺産公園の環境問題を主題とする学術調査を継続してきたが、カンボジアにおけるあらゆる活動においてアプサラ公団は強力なパートナーでありつづけてくれた。筆者が代表をつとめるふたつの研究チーム（EMSB：トンレサップ湖の生物多様性調査チーム、ERDAC：アンコール遺跡の環境評価チーム）は、カンボジアの自然環境やその保全をとりあつかう唯一の国際チームとして、また日本人研究者とアプサラ公団との合同チームとして同国の内外でその存在を知られている。

アプサラ公団でのインターンシップについては、海外でのインターンシップ実施の可能性を2009年7月に鹿島正裕国際学類長から打診されたことに始まる。いくつかの候補のなかで、世界遺産という学生にとって魅力的でありやりがいを見出せそうな場所であること、遺跡の修復から自然環境の管理、地域住民や地域社会がかかえるさまざまな問題への対応と公団の業務が多岐にわたること、公団と筆者とには10年以上にわたる信頼関係があること、これに加えてわが国から比較的近い距離にあって諸物価が安く学生の経済的な負担が少ないこと、などからこの公団を第一の候補として準備を進めた。

その後、受け入れ責任者となってくれたアプサラ公団のハン・プウ副総裁らとカンボジアへの渡航のたびにインターンシップの実施にかかる検討をすすめ、同年10月の同副総裁らの来澤のおりには金沢大学の関係者らもまじえての打ち合わせを行った。2010年2月に締結した公団と本学との大学間交流協定はこの企画への追い風となってくれた。その結果として実施したインターンシップは、今後の改善点をいくつかのこしはしたものの、さまざまな点で予想以上の成功のうちに終了したといえよう。インターンシップでの業務内容などについては学生たちの報告を参照されたい。

研究チームの仲間たちとともにアプサラ公団やカンボジアの大学での授業や実習をこれまで実施してきた。カンボジアから金沢へ公団の若手職員たちや学生たちを招聘もしてきた。しかし、いずれもわが国からカンボジアへという一方向のものであった。学生たちをカンボジアへと送り出したこのインターンシップの実施は、若い世代の双方向の交流という筆者の長年の夢の実現へのさきがけとなってくれた。業務への多大な支障もかえりみず、おおぜいの学生たちをこころよく受け入れてくれたアプサラ公団へ心からの感謝の意をまず表す。また、個人的な夢の実現へのきっかけをあたえてくださった鹿島正裕国際学類長へ謝意を表したい。さらに、不慣れな土地ながら具合を悪くすることもなく、いつも笑顔をみせてくれたインターンシップ参加学生たちにも心からのお礼をのべておきたい。

金沢大学環日本海域環境研究センター 塚脇 真二

2010 年国際学類アンコール遺跡整備公団学生インターンシップ実施の概要

- 国際学類の独自企画インターンシップのひとつとして実施。参加募集は金沢大学全学生を対象に行った（インターン単位取得は3年生に限られる）。募集期間は国際学類の他のインターンシップ同様4月23日～5月20日である。
- 参加者選考後、パスポート未取得者がいることを考慮して6月1日に全員に電子メールで採用を通知した。採用学生の構成は国際学類6名（3年生4名、2年生2名）、人文学類3名（3年生2名、2年生1名）、数物科学類3年生1名、理学部生物学科4年生1名、自然科学研究科前期課程1年生1名、うち8名が女子、4名が男子である。
- 出発までに一時間半の準備講座を3回実施した。インターンシップに関する諸注意を伝達するとともにカンボジア、アンコール遺跡について各学生が理系文系のさまざまな分野の異なった角度から調査・発表を行い知識と興味を全員で共有することをめざした。
- 出発直前ミーティングとして10月2日正午、金沢大学特別食堂すみれ亭に参加学生全員と国際学類村上教授、粕谷教授が集まり出発直前の最終確認を行った。

9月4日 午前3時よりチャーターバスが金沢市および野々市市の数か所を巡回、学生を集める。大阪関西国際空港→バンコク空港トランジット→シェムリアプ空港。塚脇教授に出迎えていただき宿舎ホテルへ。

9月5日（日）：午前はアンコール遺跡全体の視察。午後は携帯電話など必要なものの準備。

9月6日（月）：朝8時半より APSARA 本部会議室で始業式。Hang Peou 副総裁の挨拶に続き Kuong Kun Neay 副総裁の英語による詳細な全体説明。学生と公団職員ひとりずつの自己紹介。第一週のグループ担当者と対面。業務開始。

業務は9月6日月曜から10日金曜まで、および13日月曜から17日金曜までの二週間。二人ずつの6つのグループに分かれ、それぞれ一週間ずつ2つの業務に従事した。APSARA 職員が1グループ原則2人同行した。

毎朝7時にインターン生が宿舎前に集合、塚脇教授がバンで学生宿舎ホテルに到着、APSARA 本部へ。水資源部門オフィスから担当職員とともに業務に出発。昼食をとる場所、業務の終了時間、場所等は業務の内容、性質によりまちまちである。業務の後、職員の提案による視察が適宜つけ加わる。

毎日18時半に宿舎で全員によるミーティングを開きその日の業務について報告しあった。

9月11日（土）、12日（日）の週末は自由行動。土曜日午前には塚脇教授の案内でトンレサップ湖見学。

9月17日（金）午後は Hang Peou 副総裁と学生たちのディスカッション。その後副総裁によるインターン生評価。18時から市内レストランで Hang Peou 副総裁、塚脇教授招待による、関係者ほぼ全員参加のお別れパーティー。

9月18日（土）午前から帰国準備。16時過ぎ、宿舎より2台のバンで空港へ。シェムリアプ空港18時45分発→バンコク空港トランジット→大阪関西空港へ。

9月19日（日）午前7時関西国際空港着。バスにより金沢まで移動。途中渋滞があったが金沢市内には14時に到着。順次降車、帰宅。

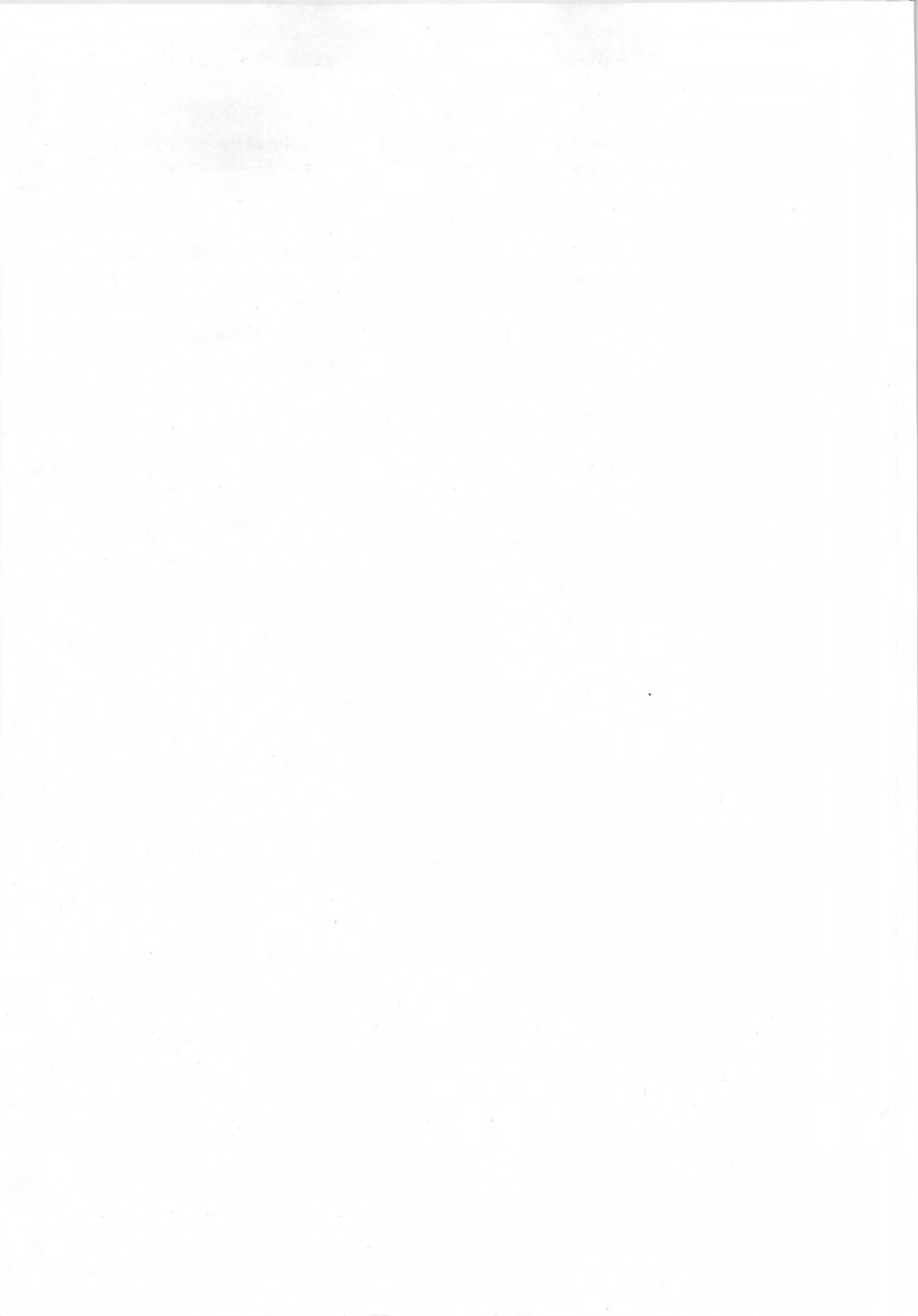
10月22日（金）「国際学類インターン報告会」で成果報告。

11月28日（日）「アンコール遺跡整備公団インターンシップ報告会」をしいのき迎賓館にて開催。金沢市民に本インターンシップの成果を報告。

- 現地に市電、バス等の公共交通機関はなく業務地は隘路もあるので、移動のためには車を用いるか、公団の担当者のバイクに同乗する。これは現地の通常の移動手段である。市内の交通のスピードはゆるやかである。
- 使用言語。インターン生は日本語と英語、APSARA 職員はクメール語、英語および何人かは仏語が達者である。業務はもっぱら英語によるコミュニケーションによってなされたがインターン生側、職員者側双方で人によってかなりレベル差がある。
- 宿舎、業務地周辺には清潔な食堂が数多く存在する。その他コンビニ、スーパー、ランドリー等も宿舎すぐ近くにあり生活上の問題はほとんどなかった。健康面でも大きな問題は起こらず、全員元気で帰国できた。

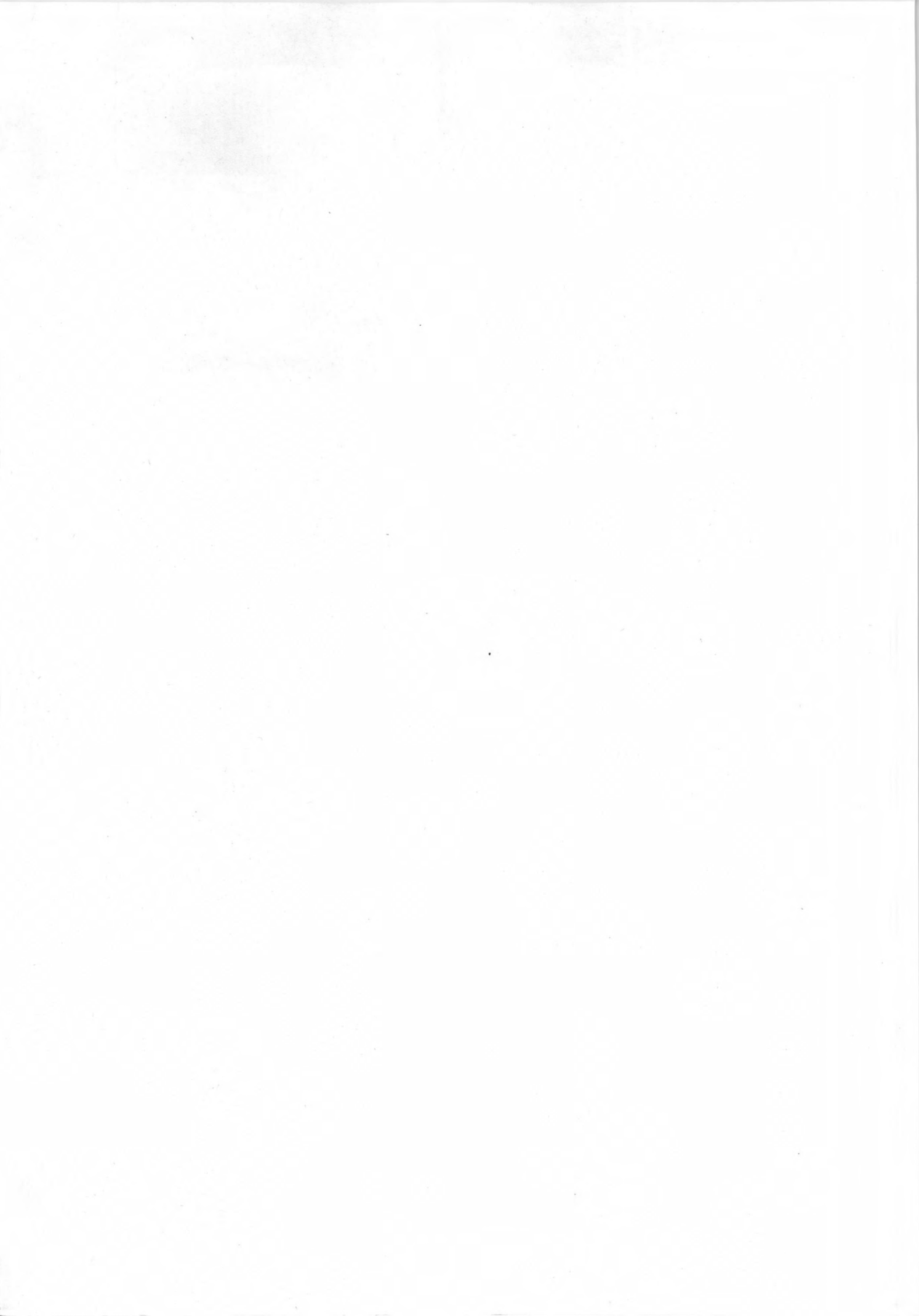
【アンコール遺跡周辺略図】





業 務 報 告

(以下の報告は、原則として一週目にその業務を担当したグループが担当)



業務 1 北バライ貯水池周辺整備

1 日目：全体像の説明と主要個所の視察。

北バライはアンコール遺跡の北部に位置しており、さらに北にいくと大規模な水田地帯が広がっている。そんな北バライでのプロジェクトの目的は大きく二つある。一つ目が水量を調節する役割である。カンボジアには雨季と乾季が存在するため一年を通じて水を安定的に供給する必要がある。さらにアンコール遺跡内では実際に多くの人々が生活を営んでおり、各家族は多くの子供をもつため結果的に年々遺跡内に住む人口が増加しているため、将来的にそれら人口の増加によりもたらされるさらなる水需要に応えるべく、水を安定的に供給する仕組みが必要と判断され、北バライ貯水池の修復が近年開始された。そして二つ目の目的は新たな観光資源を創出することである。貯水池の建設と同時にこれをも観光資源にしていこうという試みで、これら二つの目的を合わせて達成していくことを広範囲の意味での北バライプロジェクトと呼んでいる。

【完成予想図】



上の図は 2013 年頃の本プロジェクトの完成予想を表したものである。中央には現存するニャックポアン Neak Pean 遺跡を残し、その周囲には水を蓄え縦 1 km、横 5 km の貯水池としての役割をもつ。そして貯水池の下側の歩道にはその両側に植物を植え、観光用の遊歩道として活用していく計画である。水の安定供給としての実用的な意義と、遺跡を水で囲いまた遊歩道を建設することによる観光資源としての意義の両方をもった計画であることがわかる。

ただ現在の状況としては、北バライ貯水池に流入する水路を確保・整備し水を継続的に入れている状況であり、私たちの直感としてまだ完成の 1 割程度の水量なのではないかと思われる。その間、公団職員は水を貯めてただじっと待っているわけではなく、堤防のためや遊歩道に植える植物を育てたり、遊歩道の建設を進めるなど全体的なマネジメントを同時進行で行っている。

実際の私たちの業務内容に関しては、1 日目から 4 日目は北バライ貯水池の全体像を把握できるようにという公団の方々の配慮から、本プロジェクトと関わりのある全ての箇所に実際に連れて行っていただき説明を受けた。

2 日目：北バライ周辺の水の流れを把握した。乾季における水不足とともに、雨季における増水

が道の陥没や遺跡の浸食・劣化を招くことを知る。

3 日目：北バライ周辺地域における水利用プロジェクトの理解。プロジェクトが自分で想像した以上に大きな計画で長い時間を必要とする計画であることを知った。

4 日目：新たな観光スポットである植物園建設計画について説明を受ける。植物の育成状況、建設予定路を視察。

5 日目：それまでの4日間で私たちが学んだことに対してフィードバックを行った。その5日目のフィードバックの際には、私たちは「学んだこと」にさらに一ひねり加えて「私たちならではの考え」を意識し、自分たちの意見を発表させてもらった。私たちとしては観光用遊歩道に関して、実際に観光客が通るであろうコースをイメージしながら、観光客としての視点から「モデルコース」の提案を行った。公団の方々も私たちの意見に対して熱心に向きあって取り入れようとしてくれたため、非常に充実したディスカッションになった。

そんな5日間の活動のなかでも、私たちにとって最も印象に残ったことが3日目に訪れた北部水田地帯での出来事である。公団の方々が実際に建設した堤防を見ながら水の流れに関して説明をしていた最中、そこで農業を営んでいる人々が公団の方々に対して激しい口調で苦情を訴えていた。現地の人々が主張していたことというのは、北バライプロジェクトにより水田地帯の水の流れを従来のものから変えてしまったことによって、その年の農業に大きな影響が出てしまったということだった。公団の方々が出来る限り対処する旨を伝え収まりをみせたが、このことは私達自身非常に興味深くまた APSARA 公団の活動自体に関して多く考えさせられた。アンコール遺跡内に暮らす人々にとっては、北バライプロジェクトは水資源の安定的な確保ができるようになるため長期的に考えてみると全体としては大きなメリットがある。一方、短期的かつ狭い範囲で考えてみるとそれまでの生活が大きく変わってしまう人々にとってはデメリットになってしまい、時には生活が困難になってしまうことすらある。そのように考えてみると、こういった地域住民まで巻き込みながら問題に対処していくということは非常に複雑で、強い倫理観を必要とする活動なのだということを強く認識させられた。

(担当：第1、6グループ)

業務2 西バライ貯水池周辺整備

1 日目：西バライはアンコール・ワットやアンコール・トムの西側に位置する巨大な人工貯水池。縦（南北）に 2 km、横（東西）に 8 km の大きさになり、現在でも周辺に住む住民たちの重要な水源として使用されている。私たちが現地に行った時（9 月）は雨季だったが、案内をしてくれた国立アンコール遺跡整備公団の方の話によるとまだまだ水位は低いとのことだったが、それでも十分な量の水が貯まっているように見えるぐらい巨大な貯水池である。この貯水池の特徴の一つとしてその建設方法が挙げられる。通常、貯水池など建設する時には地面を掘り下げて空間を確保するが、西バライの場合は元あった平地を土手で囲うことによって水が貯まる仕組みになっている。そのため重要となって来るのが土手の整備であり、今回のインターンシップにおいてもこの部分についての説明がとて多く見られた。ここは地域住民にとっての生活上貴重な水源であるとはすでに述べたが、それ以外では憩いの場としても機能していた。まるで海辺のようにパラソルが立てられ、子供たちは水遊びをして遊んでおり、完全に住民の生活と密着した形を取っていることが良く分かった。

将来的な展望としてはまず浸食防止及び景観保護のための土手の整地とそれに伴う植林作業を行う。また観光客の呼び込みのため施設の建築を行うのだが、私たちが行った時点で詳しく分かったことは、朝日や夕日の見物用兼休憩用の展望台の建築構想である。その時すでに展望台の土台となる基礎はほぼ完成しており、確かにそこから眺めは素晴らしかった。またターゲットとなる観光客は欧米人が中心となるとの話であった。アジアの人と比べ欧米人は自転車を借り自分の足で遺跡内を見て回ることがあるため、そういった人を呼び込みたいという思いがあるようだ。

初日は車を出してもらい、各要所で下車して説明を受けながら西バライの土手上を 1 周した。西バライの周囲にもいくつか遺跡が残っており、中には当時の水利施設跡もあり興味深かった。アンコール遺跡の特徴のとして、現在もなお区域内では多くの住民が暮らしているのだが、車で少し進むと村が現れまた少し行くとまた別の村が現れる。各所に村々が点在していることから、アンコール遺跡の特徴についての理解も深まった。

とにかく初日は全体について把握することに努めたと言える。

2 日目と 3 日目：アンコール遺跡と西バライについての歴史についての説明で、西バライ中心部に位置する西メボンという遺跡を訪れた。ここには水利施設跡が残っており、当時の人たちの技術や暮らしについても学んだ。離れ小島のような場所なのでとても静かだったが、手漕ぎの船で移動し上陸したとたん物売りの子供たちが集まって来たが公団の制服を見るなりすぐどこかへ行ってしまった。ここにも小さな村があり人が暮らしていたのだ。

4 日目：土手の修復作業について説明を受け、実際に植林作業にも参加させてもらった。修復作業に関しては昔通りの手法で、つまりなるべく重機を入れないで人の手によって行うことが大切にされていた。けれど雨水などによる浸食を防ぐということは自然を相手にすることでもあるので、作業は進んだり後退したりの繰り返しであった。何気に「どのくらいで全体の作業は終了するのか」と聞いてみたところ、「分からないね、でもしばらく終わることはないだろうね」と言葉を返された。言葉は少なかったがそれ故に西バライにおける作業の果てしなさを感じた。

次に植林についてだが、植えられた木によって土壌の流出を防ぐことが出来るのでこれは西バライの修復にとってはとても重要となる。けれど以前インドの修復チームが一度木を切ってしまったため、余

計に多く必要があると職員方が嘆いていた。そんな中植林作業中の人たちに混じり、少しだけ手伝いをさせてもらった。炎天下での作業は予想通り大変であり、この先ずっと続けていくには相当の努力が必要になると肌で感じた。

5 日目：第 2 グループは当初の予定を変更、西バライではなくエコ・ビレッジ建設中のルン・タ・エクに他の班と一緒に向かった。

アンコール遺跡公園自体がとても広いため圧倒されるが、西バライという貯水池もまた巨大なスケールを誇る遺跡と言えるだろう。そこでは数多くの人々が暮らし、また西バライの水に頼った生活を送っている。これらを修復し管理していくことは、後世に文化を残すだけでなく、今そこに生きている人をも守るという大変意義ある活動である。水というキーワードで括った時、遺跡公園内において西バライに匹敵するものはなかなかないように思える。

(担当：第 2、5 グループ)



業務3 水資源調査と大気汚染観測を中心とした環境管理

1日目：水資源調査。シェムリアプ川の上流・中流・下流の水それぞれについて、水質調査を行う。この日は三か所を回る時間がなかったため、上流と中流の二か所のみ調査を行った。

採水地点に行き、バケツで川の水を汲み上げ、その場で測定用の機械を用いてpH・酸素濃度・塩分濃度・透明度・水温及び測定時の天気を記録する。また、水をボトルにつめてオフィスのラボに持ち帰り、さらに詳細な分析を行う。

ラボでは試薬と測定器を用いて、塩素(Cl)、アンモニウム態窒素(NH₄-N)、硝酸態窒素(NO₂-N)、亜硝酸態窒素(NO₃-N)、リン酸塩(PO₄)、硫酸塩(SO₄)の値を測定する。この測定器はアンコール遺跡整備公団のものだが、すべて日本語で表示されるため、操作が容易である。二か所の水についてそれぞれ分析を行ったが、成分異常は見つからなかった。

2日目：大気汚染観測。トンレ・サップ湖近くのプノム・クロム山中腹の小屋で大気汚染観測を行う。測定用の機械にフィルターをセットし、10時間かけて大気をサンプリングする。また、開始時の気温・湿度も測定する。

サンプリング中は、山の頂上にある気象観測所や寺院・遺跡、また山の周囲の寺院やマーケットなどを見学した。

10時間後にフィルターを回収し、アルミホイルに包んで持ち帰る。このフィルターは金沢大学に送り、分析を行うそうである。また、終了時にも気温と湿度を測定する。回収したフィルターはサンプリング開始時からほとんど色が変わっておらず、この地点の空気が清浄であることがわかる。



一日目：ラボの様子



二日目：大気汚染観測地点（プノム・クロム山）

3日目：大気汚染観測。シェムリアプ市内の寺院で、二日目と同じ方法で大気汚染観測を行う。この日は空き時間に、道路を走る車の交通量カウントを行った。バイク・普通車・トゥクトゥク・大型バス・小型バス・バンの、それぞれの台数を一時間カウントする。この日は一時間カウントを4セット行ったが、いずれの時間もバイクの交通量が最も多く、次いで普通車となっている。

また、周辺の通行人やバイクに乗っている人に、大気汚染についてどのように感じているかというインタビューを行った。「どこに住んでいるか」、「どのような乗り物を持っているか」、「どのくらいの頻度でそれを使用するか」、「大気汚染についてどのように感じているか」といった質問をし、

公団の方にクメール語に訳してもらい回答していただく。協力してくださった人の多くがシェムリアップ市内に住み、moto（バイク）を所有しており、普段からそれを使用している。しかし、排気ガスによる体への影響が心配であるとか、実際に気分が悪くなったりするなどの回答もあり、それぞれが大気汚染問題を感じているようである。

10 時間後にフィルターを回収する。二日目のサンプリング時とはまったく異なり、フィルターは真っ黒に汚れていた。カンボジアで多くの人が使用しているバイクは日本製のものが多く、大切に長く使われているが、その分古いものが多いため、排気ガスの排出量も多い。道路に面しているこの寺院での観測により、排気ガスによる大気汚染が深刻であることがわかる。また、この日は寺院の祭りで、大量の香を焚いていたため、その影響もあると思われる。

4 日目：水資源調査。シェムリアップ川の水位を測るためのステーションで、金沢大学が設置を援助している水位計のデータ採取を行う予定であったが、機械の故障のため、この日はタケオ寺院近くの水位計の見学のみ行う。

その後、シェムリアップ川沿いにトンレ・サップ湖近くのプノム・クロムまで行き、川沿いに住む人々にお話を伺った。生活に欠かせない水をどこから得ているかということについて、シェムリアップ川沿いであっても、川の水は料理等には使用できず、井戸水やトンレ・サップ湖の水を使用しているということであった。

5 日目：気象観測、育苗地の見学。各地に設置してある無人の気象観測所のうち二か所を回り、観測されたデータを収集する。気象観測所では、雨量・風向・風速・湿度・気温・気圧・光量を 10 分刻みに記録しており、これらのデータをパソコンに取り込む作業を行った。

その後、北バライと育苗地を見学した。現在、北バライ沿いに 12 種類の植物を植える計画があり、育苗地ではそのための苗を育てている。育苗地では現地の方々と一緒に昼食を作らせていただき、伝統的なクメールスープの作り方を教わった。また、現地の方々とお話できる機会があり、日本の家族構成、貧富の差についてや、どのように米を作っているかなどをお互いに話し合った。

以上の業務は、アンコール遺跡公園内やシェムリアップ市に住む人々の住環境を把握し、維持していくために欠かせないものである。これらの業務を通して、そこに住む人々がどのように生活しているかを知ることができた。

(担当：第 3、4 グループ)

業務 4 Run Ta-Ek エコヴィレッジ

1 日目：ルン・タ＝エクは、カンボジアの伝統的な建て方をいかした新しい家で村をつくっているところである。初日はその概要の説明を受けた。

巨大な観光地となったアンコールワット地域の大きな問題は、急激な人口増である。1992 年に 22000 人だった住人が 2005 年には 185000 人にまで膨れ上がっている。シェムリアプ中心の劣悪な環境に住む人たちのために「エコヴィレッジ」を建設し、移住してもらう計画が進んでいる。伝統的な建て方ではあるが、家のバラエティはかなり多い。

ヴィレッジの中心には池が作られている。水はシェムリアプ川から引いてくる。雨季は田んぼに水を導き、乾季には水を貯める。池にはボートを浮かべ、釣りもできるようにし、観光客を呼び込めるようにする。

5 年後、2015 年には学校も病院も完成させて、本格的な生活空間の機能を整える予定である。

2 日目：現在 33 の家が建築中であるが、建築途中のモデルハウスを視察。雨に備えて構造が二重になっているところに目をひかれた。構造には二種類、ジグザグ型とラトリス型とがある。

また近くに開館したアンコールタニ窯跡博物館に観光客を呼び込む計画も説明された。昼からアンコールワットの視察。

3 日目：風車による揚水の仕組みを理解し、池をめぐる。エメラルドのような美しい水。パティという葦のような植物を植えて水が岸を浸食しないようにしている。新しい運河を作ろうとしており、その仕組みや理由を学んだ。午後はアンコールワットほか 2 つの遺跡を視察。

4 日目：ルン・タ＝エクを一周し全体像を把握。まだ整備されていない 5 つの村を視察、説明を受けた。まだ森のままである。池がしっかりできていないし、外周道もできていない。前途多難だ。午後はバンテアイ・スレイほか 3 つの寺院を見学。

5 日目：ルン・タ＝エクで全体の復習。午後は一週間学んだことのフィードバックと質問など。伝統的建築を活かしたエコヴィレッジはカンボジア南部には既にあるが、ルン・タ＝エクも成功してほしい。

(担当：第 4、1 グループ)

業務 5 バンテアイ・スレイ遺跡、スラ・スラン貯水池における観光周遊路の整備
カンボジア伝統家屋の保全管理

1 日目：スラ・スラン設置の水位計、周辺の水資源の視察。スラ・スランは王の沐浴場であった大きな池である。アンコール遺跡公園における水資源利用の特異性について細かい説明を受けた。バンテアイ・スレイはスラ・スランからシェムリアプ川をさかのぼったところにある、赤砂岩でできた美しい寺院である。建物に彫られている女神(APSARA)たちも美しい。

2 日目：バンテアイ・スレイの水管理について。周辺の水門、水の調査。小さい池が周りにいくつかあるが、北側に大きな池があり観光用の場所としての整備が進められていくようである。この池は山の方の稲田にも水を供給する。

3 日目：バンテアイ・スレイのセントラル・チケットセンターの整備の様子。スイスチームによる整備で、遺跡のすぐ近くでひしめいていた土産物屋が遠ざけられ、整然と並んだ建物の中にまとめられ、バンテアイ・スレイはこぎれいな観光地になったといえる。これでもまだ完成度 90%だとのことで、将来は ATM も導入した本格的観光地にする予定。バンテアイ・スレイ周辺はモデル田園であり、苗が支給されて植えられている。

4 日目：スラ・スラン近くの建築センター (Khmer House Interpretation Center) の伝統家屋視察。ここは手工芸品作りで生計を立てているひとつの村であり、工芸品作成の実情について理解を深めた。センター内にはいろいろな植物が植えてある。われわれも種まき、コンポスト農法を体験した。アンコールトム、バイヨン視察。

5 日目：アンコール・トムの外周をめぐり水利用を視察。外周の四隅にあるお寺を視察。川から水を引いて堀にしているのだが、12 世紀のお寺の建て方の違いを教わる。水位の減少と改善のためのプロジェクトについて理解を深めた。

博物館の視察。シハヌーク博物館はバンテアイ・クデイ出土品が展示され、国立博物館は目玉がアンコールの 3D 映像である。博物館というものの意義を考えなければならない。

(担当：第 5、2 グループ)

業務 6 バコン中央祠堂の修復、アンコールトム水利網の整備

1 日目：アンコールワットとアンコールトムの間の水路と、アンコールトムのお堀の視察。事務所を出発してアンコールトムの東側の門からはいて南側の門を抜けていき、その途中でアンコールトムのお堀の角の視察。かなり細くてでこぼこした道を進むと、そこに釣りをしているおじいさんがいて、遺跡のすぐそばで人々が生活していることを実感した。その後アンコールワットのすぐそばまで行き、アンコールトムのお堀から続いているという水路を見学して、アンコールワットを視察した。アンコールワットからの帰り道にも、水をコントロールしている小さな溝のようなところを見学した。

2 日目：ロリュオス遺跡群といって宿舎のあるシェムリアプ中心地から 15 キロほど南東にいった場所である。これは、アンコールに王都が移る前の遺跡群で、アンコール遺跡が主に 12 世紀ごろの遺跡であるのに対し、それより前の 9 世紀ごろにつくられた遺跡群である。ロリュオス遺跡群には 3 つ遺跡があつて、王都の中心寺院であつたバコン、「聖なる牛」という意味をもち 3 つの中で一番はじめにつくられたプレアコー、貯水池の中心につくられたロレイの 3 つがある。今回の業務現場はバコンとプレアコーの 2 か所である。

遺跡群に向かう途中に遺跡の建設者や歴史について説明を受けた後、まず私たちはプレアコーにいき、実際に遺跡の修復現場の様子を見た。遺跡のすぐ横には小屋があり、そこで 9 枚の紙を見せてもらい、遺跡の修復方法について説明を受けた。具体的には、この遺跡は基本的にブロックが積み重なってできている構造で、内側と外側のブロックが平たんに並べてあるのが特徴であるらしく、それをちゃんと守って修復しているという点や、外側には古い元々のブロック、内側には新しく作ったブロックを並べ、外からは古いブロックしか見えないようにする点などを教わった。この二点は説明を受けた後、修復している場所に近づき、自分の目で確かめることができた。

また、ブロックをただ積み重ねただけでは強度がでないので、ブロックとブロックをつないで強度の補強をするために使う、ライムモーターの作り方を教わった。ライムモーターの材料は、古いブロックを砕いて作ったパウダー 2 カップ、石灰 1 カップ、砂 1 カップ、液体状のパームシュガー少々で、これらの材料を順に平たい鍋に入れ混ぜ合わせる。そして、最後に水をしみこませたら出来上がりだった。使い方は、出来上がったライムモーターをブロックの上に塗り、その上からまたブロックをのせてくっつける。その上から水を少しかけて 2、3 日置くことで接着の強度が増すということを教わった。



3 日目：アンコールトム。12 世紀の市街の水路。運河 A。

アンコールトムの水路を視察。まずアンコールトムの敷地の角にある小さな遺跡、その後フレンチウェアという小さなダム。職員の一人がその水位を測ってメモをとっていた。次に水門のある小さな橋に行き、そこでも水位を測り記録していた。水位は、毎日測るそうである。先に行ったフレンチウェアのあるところの水位が上がったら小さな橋の水門を閉めてフレンチウェアの水門を開け、水位を調整するのだという説明を受けた。最後に、アンコールトムの古いお堀の中まで入っていき、12 世紀に使われていたという水の出入り口を見学した。

4 日目：次に、プレアコーからバコンへ移り、バコン寺院の横にあるパゴダで、フランスとベトナムのチームが協力して壁画修復を行っている様子を見学し、フランス人の専門家の方に直接話をきいた。外側も内側も壁全部に絵が描かれていて、その半分以上が修復途中だった。



5 日目：地下水の水質調査。地下水の質の調査をするために各村を回った。調査の内容は、まず村の地下水の井戸のようなところの水位を測り、その後その水を汲み、持参した水質計を水に入れて pH・透明度・酸素濃度・温度・塩分を測定して、紙に測定した時間やその時の天候などと一緒に記録する。水位の測定は毎日行うが、機械を使って調べるのは3か月に1回である。たくさんある井戸の中から選んだ7つの地点の水を調査しているそうだが、今回はそのうち6か所だけを調査した。水質計で測定したあと、その水をラベルを貼ったペットボトルにそれぞれ入れて事務所に持ち帰り、詳しい検査をした。まず水をろ紙でろ過し、それから6つの項目（塩化物・アンモニウム態窒素・亜硝酸態窒素・硝酸態窒素・リン酸・硫酸）についてそれぞれ薬品を入れて検査する。機械と試薬セットは金沢大学からのものだったので日本語で、私たちにとっては扱いやすかった。試薬セットは、ラボにある冷蔵庫に大切に保管されていた。それぞれの項目に専用の薬品があり、それぞれ違う方法（混ぜ方：薬品を入れてよく振る、または5回振る・薬品を2種類入れるなど）があり、その検査の仕方を書いた紙が英語とクメール語で2種類あった。その紙を見ながら検査を進めたが、機械が1つで試験管が2つしかないので大変時間がかかった。一か所の水で1時間強。それを6つなので勤務時間中に全部終わることができなかった。

このように、水の管理は天候や人の生活に深くかかわっているのもので、その管理は毎日、または3か月に1回などの定期的な、非常に地道で根気強い努力・作業が必要であるということを実感した。

（担当：第6、3グループ）

自由エッセー

[自由エッセー]

アンコール遺跡群でのインターンシップを終えて

人間社会学域人文学類フィールド文化学コース3年

井上智恵子（第3グループ）

私にとっての初めての海外が、このアンコール遺跡群でのインターンシップであった。「大学にいるうちに、一度くらい海外に出てみたい」というのが、入学当初からの希望であり目標であった。そのような中、世界遺産であるアンコール遺跡群でインターンシップをするという機会に参加できたのは、本当に幸運であり、非常に為になるものであった。

単なる観光で行くのなら、社会人になってからでも可能だ。しかし、アンコール遺跡群を管理整備している公団に入るのはまた違うものだ。観光客が外からの視点だとすれば、逆の内側の視点から世界遺産についてみるができるのだ。世界に誇る「顕著で普遍的な価値」を有する遺産、さらにはそれに関わる環境・社会・生活を、どのようなアプローチで維持管理していくのか。これは、なかなか外からはわかりにくい点である。専門として、幅広く文化について学んでいると、現在私たちがこの目で見る事が出来る「文化」をどのように後世に残していくのか、という点についても関心を抱いた。勉学という点においても、非常に興味をそそられるものだったので、このインターンシップに参加することを決めた。

さて、このインターンシップは、海外経験が一切ない自分にとって仕事面でも生活面でも発見ばかりであった。当たり前だが、周りにいる人の99%がカンボジア人である。それだけでも自分にとっては新鮮であった。完全にお上りさん状態であった。

業務はもちろん英語であった。私は、英語が得意ではない。読む・聞くはまだなんとかできているが、話す方はからっきし駄目であった。業務をしていてとにかく強く感じたのが、英語力の大切さである。英語力のなかでも特に、自分の意見・考え・質問を相手に理解してもらうための自発的コミュニケーションの重要さを、身を以て感じた。業務をしていても、もっと聞きたいことや言いたいことがあるのに、それを言えない・伝えられないことが、驚くほどストレスになるものだと知った。

また、自分はそれまで、視野を内側に・日本の中だけにとどめてしまっていて、海外・自分とは違う文化の中で暮らしている人々と直接関係性を持つことに消極的であった。今回このインターンシップに参加して、それまで消極的だった「自分とは異なるコミュニティに属する人」とのコミュニケーションを、より積極的に行っていきたいと自然に思うようになった。今まで「今しかない」というときに消極的になってしまったり、引っ込み思案になってしまったりしていた自分からは考えられない面であった。

コミュニケーションに関連して、APSARA スタッフや塚脇先生にはクメール語をいくつか教えてもらった。単語やちょっとしたフレーズ程度だが、そのなかで「コム スロラン クニョム」という、相手を振るときの言葉（つまり、Don't love me）をよく理解しないまま言って、スタッフの大爆笑を食らったこともあった。しかし、現地の言葉を知るというのは、その国に興味を持つことでもあるのだと思う。例えば、現地の人にインタビューするときでも、「オーケン チュラン（ありがとう）」の一言を知っているだけで、実際随分違うもんだなあと思ったりもした。凄く単純なことなのだが。

一方、休日に市場などに行くと、驚くほど日本語を聞いた。現地で店を出している人やトゥクトゥクが的確に日本人だと判断して「こんにちは！」と言ってくるのだ。どう頑張っても日本人だと見分けられてしまったのには、少し悔しくもあった。市場でも、こちらが英語で話しかけても、すべて返事を日本語で返されたりもした。なんだか悔しくて、意地で英語を使ったこともあったが、到底勝てるものではなかった。「日本人はものを買ってくれるから」という観念があるようだが、そうだとすると、彼らにとっては日本語を覚えることが死活問題でもあるのだと思うと、複雑な気分になった。

市場で会うカンボジアの人も、遺跡で会う人たちも、とても親切だった。どうしてもこちらが「日



本人」であるとして見ているとは思いますが、そうだとすると人が良く、親切であった。タケオ寺院でお参りしたら、お守りの腕輪を巻いてくれたおばあさん。「またね」のクメール語を教えてくれた、物売りの男の子。一生懸命ストールを売っていて、「おぼえてね、またあとでね」と言っていたボラ。市場で困っていたら、気軽に、しかも懇切丁寧に対応してくれた女の方たち。いきなりトゥクトゥクを寄せて「乗ってくかい?!」と言って、たまたま乗ったら以後見かけるたびに「おーい！チエコー！」と声をかけてきたマップ。たくさんの人の素朴さに出会った。

しかし、そんなたくさんの素朴な人たちと会いながら、いっそ「日本人」じゃなくなれたらいいのにと考えた瞬間もあった。非常に失礼な事だとは思いますが、どうしても、自分が「日本人」であることを、一種のエサのようにしているのではないかと思うことがあったからだ。カンボジア人とか、日本人とか、民族でのくくりがなくなったらいいのになあ、と思ったこともあった。しかし、そうになったら英語でうまくコミュニケーションがとれない自分は、今回のような経験は得られなかった可能性が高いだろうと思うと、自分のコミュニケーション能力の低さを非常に残念に思ったりもした。

それにしても、APSARA スタッフを含めて、ほとんどの人がびっくりするほど素朴であった。正直、業務ではあまり役に立っていないであろう私に、スタッフたちはとても親切にしてくれたり、なんだかんだと話しかけてくれたりと、本当に頭の下がる思いだった。業務のお昼休み、ハンモックに揺られながら話をしていた、「なんでこんなにいい人たちなのだろう。そんな人たちがいるカンボジアはなんていい国なのだろう」と、ぼんやりと考えていた時、ふと唐突に数十年前にはここで悲惨な内戦があったことを思い出して、その落差にぎょっとなった。カンボジア内で争っていたことがあったという事実、本当にそんなことがあったのかと疑ってしまったぐらいだ。

業務を行った遺跡内でも、たくさんの現地住人に出会った。遺跡の隅にごろごろと転がっている、

修復されていない石材のうえに乗って遊んでいる子供たちもいた。遺跡の端にある小さな門で赤ちゃんをあやしている若いお母さんもいた。それから、遺跡の前には必ずと言っていいほど、ものを売っている子供たちがいた。そんな人たちに出合うたびに、アンコール遺跡群が、現地の人が暮らす生活の場所であり、同時に生活していく為のお金を得る資源でもあることを実感した。

今回業務では、管理公団のなかでも、主に水資源や森林と言った自然部門に入って仕事をしたが、業務の空いた時間には APSARA スタッフが遺跡に連れて行ってくれた。同じグループ3だった畑さんも同じコースに所属していて、二人とも遺跡や考古に興味があると知ってか、なかには、チャウ・スレイ・ビホールという廃墟のようなマニャックな遺跡に連れて行ってくれたりもした。おそらく、パンフレットに載るような遺跡は、ほぼ回りきったと思う。

私は専門で仏教を中心とした宗教や文化について学んでいるため、東南アジア最大級の遺跡群であるアンコール遺跡群を見ることができたのは非常に嬉しかった。初めてその姿を見たときは、それまで映像でしか見ることのできなかった物が本当に目の前にあるということに、感動を通り越して「なんだか凄いところに来てしまった……」という呆然とした状態になってしまった。

私は主に日本の文化について学んでいるが、特に「信仰」という一見形に残りそうで残りにくいものについて興味がある。アンコール遺跡群は、世界に誇るカンボジアの国の遺産であり、世界各国から大量の観光客が訪れる観光資源でもあり、なおかつ現在も多くの人が生きている居住空間でもあり、カンボジア人にとっては信仰や心の拠り所でもある。

今回このインターンシップに参加して、アンコール遺跡群がそこに住み関わっている人にとっての大きな心の拠り所であることを強く感じた。彼らにとって、アンコール遺跡群は生活環境の一部であり、切っては切れないものであり、なにより誇りであることを、APSARA スタッフと一緒に業務をしていて感じた。日本では（日本人にしても）、世界遺産や文化財をみるとき、もの（建造物・登録物など）だけを見てしまう傾向が強い。しかし、彼らからは日本人が自国の文化財に持つ感覚とは違うものを感じた。もっとおおらかで、全体を大きく包み込み、なおかつそれを自然体でしているような感覚だ。今回、遺跡そのものに関わる部門ではなく、周りの環境と関わる部門に入ってみたことが、このことに大きく関わっていると思うが、「文化財だから」「世界遺産だから」「生活の場だから」などと言えたものではなく、もっと広い「かけがえのない私たちのもの（こと）だから」という感覚をもっているのではないかと感じた。そしてそれは、日本人である私が自分の国の文化について考えるとき、もっと単純に言えば、事実、一個人として大きな文化の流れの継承者であることとして、忘れてしまっていた、抜け落ちてしまっていた、とても大切な感覚なのではないかと思った。

最後に、このインターンシップに参加するにあたって相談に乗ってくださった先生方、そしていきなりの独断だったにも関わらず送り出してくれた両親に、この場を借りて御礼申し上げます。

[自由エッセー]

アンコールインターンシップ報告 海外での就業体験

人間社会学域人文学類フィールド文化学コース2年

河原由貴（第5グループ）

現地につき仕事に就くと、出発前にあった不安は吹き飛んでしまった。カンボジアでの生活はすべてが私にとって新鮮で、不安なんて感じている暇はなく、見るもの聞くものに夢中になって毎日があっという間だった。

日本にいたころより少し早めに起きて制服に着替え、前日に買った初めてみる果物を朝食に食べて、日本と違いトゥクトゥクやバイクが多く通る道路を見ながらオフィスへ移動して仕事を開始した。仕事は私たちが色々な体験ができるようにあちらの方が考えてくれた日替わりの業務を行った。専門的知識や技術があるわけでもない私たちのために、公団の方たちは機材や遺跡の解説を丁寧にしてくださった、遠くの遺跡で業務があるときはほとんどが移動時間になったり、車もバイクも通れないような場所へ徒歩で向かったりした。業務のあとはホテルの近くを散策して食事をしたり、現地のマーケットに行ってみたり、遺跡の観光をしたり、観光客のようなこともできた。

業務だけでなく出勤や食事、普段の生活も新しいことばかりで、私は毎日楽しくて仕方なかった。現地に行って初めて知ることがたくさんあった。アンコールワットはアンコールパークの中の寺院の一つに過ぎないこと、現地の人はクメール語を話す英語やフランス語を話す人も多いこと、アンコール遺跡という世界遺産の中で人が生活していること。業務を行なって初めて知ることにもたくさんあった。アンコール遺跡の修復は世界各国のチームが行っていること、遺跡全体の水位が年々低下しており、それを元に戻すためのプロジェクトが進行していること、遺跡内で生活する住民と管理側で対立があること、それらの問題を解決するために、遺跡を守るために公団の人たちが努力していること。

業務中に公団の方に質問されることが多くあった、「君たちから見てこの計画はどう思う？」だとか、「君が観光客ならこの施設に来たいと思う？」など、日本人としての意見を求められるもので、自分の意見を言うことだけで業務に、貢献になるのだろうか最初は疑問に思ったが、自分の感じることを伝えることは意外に難しく、それを違う価値観をもつ相手に分かってもらうことは更に難しかった。でも自分たちを受け入れて対応してくれる公団の方々に専門知識も技術もない自分ができることはこれだ、と思い一生懸命自分の思うこと、感じることを伝えた。

振り返ってみると自分は準備不足で未熟で、もっとできることがあったと後悔することばかりだった。しかしカンボジアでの生活の中で私はたくさんの経験を得、価値観の変化があったり、自分の意見をもちそれを伝える努力をすることを学び、少しずつ業務に積極的に関わることができるようになった。そしてこのインターンでの経験のおかげで私はよい方向に変化できたのではないかと考えている。この変化をくれた公団の方々に、カンボジアにもっと何かを返すことができればいいと考えている。

[自由エッセー]

カンボジアでの2週間を振り返って

金沢大学理学部生物学科 4 年

菊岡翔太 (第 1 グループ)

カンボジアでのインターンシップを終えてから3ヶ月経過した12月の今、この報告書を書いています。ですので、現地での体験からの興奮覚めやらぬまま書いているのではなく、体験したことを自分自身もう一度思い出しながら最も印象に残ったことを綴っている、そんな状態です。現地での2週間の生活を思い返すことで改めて深い考えができればと思っています。

私が2週間のインターンシップで3ヶ月以上経った今でも強く印象に残っていることは、業務内容そのものに関することよりもむしろ、日々おこなっていた現地の人々とのコミュニケーションです。様々な人と接する中でカンボジアに住む人々の素晴らしさを感じることができた2週間だったと今でもはっきりと言うことができます。

私自身が考える現地の人々の素晴らしいと感じることが二つあり、その一つ目が現地の人々もっている「人に対する興味」です。日本にいて生活をしていると、見ず知らずの人に対して興味をもって話しかけるということはよほど勇気をださなければできませんが、カンボジアの人々とはとにかく人に対して興味をもって話しかけてくれます。私自身が現地の人々にとってみたら外国人という特殊な状態ではありましたが、APSARA 公団の方々も初日から私たちに興味をもって話しかけてくれたため、すぐにコミュニケーションをとることができました。公団の方々だけでなく、その他にもたくさんの人々と交流を取りました。例えばホテル近くのコンビニでパソコンを開いていると、近くに座った現地の人が気さくに話しかけてきてその場で友達になったりと、生活しているなかでこれほど抵抗なく友達をつくらることができる感覚というのは普段経験しない分、自分自身にとって非常に新鮮でした。

そして二つ目に、現地の人々が常に見せてくれた笑顔も非常に印象深いです。公団の人達は話をしているときはどんなときでも常に笑顔で応えてくれる、そんな優しさをもって接してくださいました。その笑顔というのは外国人である私たちに対して特別に作っているのではなく、どんな人に対しても心から自然と出てくるものであり、すごく自然に感情を表現できるその素晴らしさを同時に羨ましくも思いました。また私自身農村に住む人々との間でも言葉によるコミュニケーションがとれなくても、常に笑顔で応えてくれるため言葉を必要としない交流をとることができたことも心に残っています。

カンボジアの人々がもつ「人に対する興味」であったり、人との関わりの中で自然と出る「笑顔」であったり、改めて考えてみると人々は日々の生活をごく自然にそしてシンプルに楽しんでいるんだなあと思います。日本で生まれ生活する者としてカンボジアという国は決して経済的に豊かとはいえないですが、それで比較することができないほど人々が日々の生活に対し幸せを感じていることを実感しつつ、私自身幸せの意味そのものを深く考えさせられました。

また、インターンシップに参加する前にカンボジアの歴史に関して勉強をしていくなかで避けて通れない歴史が、ポル・ポト政権下における大虐殺や内戦などの暗い情報ばかりでした。しかし実際に訪れ2週間生活をしていくなかで、現地の人々はたくましく、そのような過去が実際にあった

ことすら感じさせないくらいの笑顔で生活を楽しんでいる姿勢が印象に残っています。

カンボジアでの2週間の滞在では普段日本で感じることをできない数多くの体験をすることができ、また多くの人と交流ができたことは自分自身にとって大きな財産になりました。これら多くを学んだことによって、一人の人間としての幅を広げることができたのではないかなと自分自身思っています。



[自由エッセー]

アンコールインターンシップに参加して

金沢大学人間社会学域国際学類米英コース3年

曾我 卓（第2グループ）

・はじめに

自由に書いて良いと言われ正直悩んだけれど、内容はともかくこのアンコール遺跡整備公団におけるインターンシップに参加したその理由は大切だと思ったので、ここでそれを述べたいと思います。あとは現地での実際の生活や業務内容について、他の参加者とかぶってしまう部分も多々あると思いますが、私に割与えられた分については上記の内容にしたいと思います。

・参加理由について

では最初に今回のインターンシップに参加した理由について述べたいとおもいます。まず一つ目の理由として、就職活動の一環という名目があります。当時はまだ旅行会社などにも興味をもっていたので、その参考になるのではないかと考えていました。二つ目の理由は大学生であるうちに一回は日本から出て、海外に行ってみたいという気持ちがあったからです。在籍しているのが国際学類ということもあり、周りの人たちは短期・長期の留学など様々な形で世界を体験しています。せっかくそのような事が可能な恵まれた環境下にいるのだから、何かしないともったいないという気持ちでいた所、カンボジアに行かせてもらえる機会がやって来たということになります。三つ目最後の理由として、個人的に将来行ってみたい国・場所の一つにカンボジア、特にアンコール・ワットがあったからです。正直これが一番大きい理由になるかもしれません。おそらくどんな人にも人生において一度は行ってみたい場所、やってみたいことなどいろいろあると思いますが、それがただの旅行で終わらず様々な経験が出来たことはとてもうれしく、楽しかったです。私はアンコール・ワットに限らず世界遺産に興味を持っていて、中学校の夏の自由研究では世界中の遺跡について調べてみたりもしました。何に興味をひかれるのかというと、昔の人々がどのように巨大な神殿や寺院を建設したのかなど詳しいことは分からないとしても、当時の様子を想像するだけでワクワクしてきて、一人でしみじみする所でしょうか。何か心地よい音楽をかけながらずっと眺めていたりするのもいいですね。言葉で上手く表せないとしても、これは好きだなとか、やっぱいいなあと思うことはあると思います。そんな気持ちにさせてくれるものに実際に触れることが出来たのもこのインターンシップでした。

・現地での生活について

ここでは2週間のカンボジアでの生活などについて書いていきます。現地での生活に入る前に、今回が初めての海外への出国ということで、パスポートの取得や巨大なキャリーケースなど準備する物もいろいろとありました。パスポート発行時に必要となる証明写真のサイズを間違えてあわて再度撮りに行ったりもしました。たまに間抜けな事をしてしまうのでカンボジアに行っても大丈夫かなと自分で不安になったりもしました。キャリーケースに関しては、こんなに小さくなくても大丈夫だろうと思って実際に荷物を詰めてみたら、結構パンパンになって重かったです。日本にいる時点でも初めてな事ばかりであったと言えます。機内食で出たカレーが意外とおいしかったな

と思いつつ、カンボジアに現地時間での夜7時ぐらいに到着しました。夜だったのでホテルへ向かう車から町の様子はあまり分からなかったのですが、翌朝外へ出て見た光景はテレビや写真でよく見るような東南アジアの風景と言うべきものでした。予想外だったのは、あまり日本と変わらないような生活が出来た点です。普段がとても恵まれた生活なので、東南アジアと聞くとどうしても少し下の水準での暮らしを想像してしまいます。また実際現地ではかなり厳しい生活を送っているだろうと思われる生活を目の当たりにし、2週間程度では見えてこない問題もあったと思います。けれど用意してもらったホテルの近くにはコンビニやスーパーがあつて極端な話、お金と必要最低限の知識さえあれば問題ないように感じました。

研修中にアンコール遺跡内に点在する屋台などで昼食を取ることが出来る機会もかなりあり、ここでは初めて食べるような物ばかりで「食文化についての比較」なんていうのも可能だろうなと思いました。他に驚いた事としてはバイクの普及率がものすごく高いのではないかなと街中を歩いていて感じました。2人乗り3人乗りは当たり前で、子供を入れて5人ぐらいが乗り込んで走行しているのを見たときは非常に驚きました。研修中の移動もバイクが中心で慣れるまでは少し恐怖感もあったのですが、気温が高い中風を切って走るのは気持ち良かったです。おそらく生活面に関してはこのぐらいだと思います。自分の想像ではもっと勝手が利かないイメージしかなかったので、いい意味で裏切られて良かったと思います。

・研修について

各自の配属に関してはこちらからやりたい業務の希望を出すことも可能でしたが、今回はあらかじめ公団側から示された部門への配属という形でした。けれど自分が配属された所以外の話を知っていると、どの班も良い体験をしたようで、おそらくどの部門でも大変意義のあるアンコール遺跡整備公団の業務を体験することが出来たと思います。次からこのインターンシップに参加される方は現地で行ってみたい業務や関心のあることをあらかじめ決めておくのも良いかもしれません。

それでは私の主な研修内容となった西バライの整備について話していきたいと思います。全体の研修内容についてまとめたページでも詳しいことが記載されているのですが、西バライはとても広大な地域です。公団事務所を出発し、アンコール・ワットやアンコール・トムを横目で見ながらバイクで約15~20分の場所にあります。遺跡公園全体で見た時にはその名通り一番西側に位置しています。様々な遺跡がまだ修復中であるようにここ西バライも完全な状態ではなく、降雨による浸食から土手を保護する作業が常に進められています。自然を相手にした作業なので、正直先が見えないというのが公団職員の感想でした。でもすでに整備が終わりきれいに整地された箇所を見ると、まだまだ観光客が訪れることの少ないこの場所がにぎやかになった状態を想像してしまい、早く完成しないかなとも思ってしまいます。

西バライ以外にも空いた時間を使っていろいろな場所も案内してもらいました。有名な遺跡から普段はあまり入っていけないような場所に連れていってもらい、遺跡に興味がないような人でも興奮することは間違いなかったと思います。途中、中国と日本の修復作業の違いを説明してもらい、そこで中国はやることは早いが見栄えなどの質に関しては優れているね、と言われた時は自分が修復したわけではないけど嬉しい気持ちになりました。確かに中国が修復した箇所は、元々あった部分と比較して明らかに異質だと分かるのですが日本の場合はそこに違和感が出ないように処理を施し、さらに耐久性も高めるといった具合でした。こんな所でも日本の技術が活かされており良い発見となりました。

・最後に

出国直前になって両親からお守りが遅れて来た時には、初めて自分がやろうとしていることの意味を知った気がしました。あっという間に現地実習が終わって日本に帰国してみると疲れたとしか思えなかったですが、少し時間が経つと自分はものすごく貴重な体験してきたのだと改めて感じました。日本語が使えないという環境、世界遺産を保護するという意義ある活動、仕事とは何か、途上国における環境活動など一度にたくさんの事に触れた体験でした。将来、実際に世界を舞台にした仕事に就くかどうかは別として日本では経験できないことを通じて、働くと何かを考えるきっかけにはなりました。このような機会を作って下さった金沢大学及びカンボジア国立アンコール遺跡整備公団の方々、またお世話になった先生方や両親、友人に感謝しています。

このインターンシップが末永く続くことを願いつつ終わりとしたいと思います。

ほぼ思いつくままに書いていただけですが、次回からのインターンシップに少しでも役に立てばうれしいと思います。

[自由エッセー]

カンボジアインターンシップの総括

金沢大学人間社会学類国際学類国際社会コース3年

西尾 拓 (第2グループ)

私は2010年の夏季休業中に2週間にわたるこのカンボジアへのインターンシップに参加しました。この体験は私にとってかけがえのないものとなり、そしてこれからの自分の将来についても考え直す良い契機となりました。

最初にこのインターンシップへ参加しようとした時、私には参加に対する大した動機はありませんでした。強いて言うなら、それまで一度も海外に出たことがなかったため、一度日本以外の国を体験してみようといったインターンシップ(就業体験)ということから考えるにとっても不純なものでした。そうした不純な動機のため、インターンシップという意識が薄く、ある種の旅行感覚でいたためインターンシップ開始に先んじて何度か行われた事前の学習会への欠席や遅刻といった行為をしてしまいました。

このインターンシップの参加者は合わせて12人でした。そこで私たちは2人1組になり6つのグループへとわかれしました。私のパートナーは同じ国際学類の曾我君です。私たち二人のインターンシップ先での業務内容は1週間目がカンボジアで最も大きい治水施設の整備、そして2週間目がアンコール遺跡群から少し離れたところにある施設での観光産業についてでした。

今回私たちが行ったのはアンコール遺跡群周辺で主に治水事業や自然環境の保全、大気の正常化、そして現地住民の社会への参加の促進等を図っている、APSARA という国営の公団です。国営ということもあり、そのオフィスはとても大きいものでした。現在オフィスの改築工事中であり、私たちが従事した際は体育館を臨時のオフィスとして活用していました。オフィスに全員が到着するとまず顔合わせの式が行われ、公団でインターンシップ中にお世話になる方々とあいさつと自己紹介を行いました。まずそこで驚いたことがありました。私は英語を人並み程度には話せるといった漠然とした自信がありました。しかし公団に属する職員の方々と話してみても、自分の能力の不足さを痛感しました。彼らの母語は英語ではなくクメール語であり英語は第2言語と言うべき言語であるのに公団の長から一般職員に至るまでほぼすべての人が英語を話していました。そして中にはフランス語も流暢に話す方がいらっしやり、自分の準備不足を実感しました。

それでは私なりに1週目の活動を振り返ろうと思います。西バライと呼ばれる巨大な貯水施設があります。その大きさは縦2.2 km、横8 kmという長さで、アンコール朝時代には実際に雨季にその雨をためる貯水施設として運用されていました。しかし現在、度重なる雨としっかりとした整備が行われてこなかったために浸食が広がっています。公団の方々はそうした現状を改善し最終的にはアンコール朝時代と同じように貯水施設として運用するところまで計画しています。現状の改善とは主に、雨によって浸食された土地を整地し、そしてそこに植林することです。そうした整備には公団が西バライ周辺に住む住民を雇い従事させています。しかしこの植えられた木々は2、3年たつといい塩梅の大きさになると現地住民の家庭で燃料として使うためにどんどん伐採されているのが現状です。将来のためには現地住民の意識もまた変えていかなくてはなりません。今はまだそうした対策は本格的に行われていません。私と曾我の二人はここで公団の活動について一通りの説明を受けた後、実際に植林を行い、そしてその地域に住む住民の視察に参加しました。

1 週目の最後の日はいそれまでの総括を公団の方とする予定でしたが、私たちの担当の方の予定が合わなかったために、私たちは違うグループの活動に参加させていただきました。それは、ルン・タ＝エクと呼ばれる地域で行われる昔の人々が住んでいた住居を再現してそこに現地住民を住ませ、二酸化炭素や無駄なエネルギーを出さないエコロジーな村、エコヴィレッジを作っている活動です。エコヴィレッジに住むことを選択すると、家と、ある程度の土地が与えられ、そこに定住することになります。計画では全部で10以上の村ができる予定ですが今はまだ一つ目の村を作っている最中で居住者もまだ少ないです。ただ、すでにスーパーなどの日常に必要な施設の誘致も決まっておりますこれから発展していくことは間違いのない活動です。実際に見てみて、カンボジアのように熱帯で年中あたたかい地域でしか難しいとはいえ、エコ住宅は素晴らしいものだと感じました。外が暑くとも、家の中に入ると日が遮られ、風が入る仕組みになっているため、日本のようにエアコンや扇風機といった器具がなくても快適に過ごすことができました。

2 週目はバンテアイ・スレイと呼ばれるアンコール遺跡から30 kmほど離れたところにある遺跡群での活動でした。この遺跡はすでに公団の計画の80%ほどが終わっているところであり、ほかの遺跡群のモデルケースとして見られています。バンテアイ・スレイにもまた貯水施設のような池があり、その水を使ってコメを栽培していました。そのコメは新品種であり、バンテアイ・スレイで実験をうまく育つことができたなら付近に住む人々に配り、そうして品種改良をしているのだと話されました。お土産屋や食事をするレストランといった施設は現地住民が運営しており、公団はこれから銀行や救急の応急処置室を設置し、より観光客が快適に過ごせるように、という活動が残されています。

この2週目の最後の2日間ほどはアンコール遺跡群内で生活している住民の生活を視察しました。彼らは伝統工芸の楽器や木の彫物を自分たちの手で作り、それらを観光客に売ることによって生計を立てています。視察した地域で見た彼らの生活ぶりは決していいものとはいえなかったです。1 週目に見たエコ住宅と比べて、彼らの住む家は小さく、大人数の家族が住むには適していないようでした。

2 週目の最後の日、私と曾我はエコヴィレッジのデザインを担当した方の家に招待され、そこで夕食をご一緒させていただきました。その家はとてもデザイン性に優れていて、とても感動した覚えがあります。夕食はカンボジアの伝統的な料理を作ってください、魚料理やみそ汁、さらには独特なスパイスをつけて食べる肉など、様々な料理を頂きました。招待してくださった方は私たちの担当ではなかったのですが、カンボジアの建築様式の変遷といった珍しい情報などを教えてください、本当によくしてくださいました。

このインターンシップを最初は軽い気持ちで考えていましたが、しかし振り返ってみて、一生に一度もできそうにない素晴らしい経験だったのだと実感しています。インターンシップ最後の日にAPSARAの長官が私たち一人一人に意見を聞き、それについて議論する場が設けられたのですが、そこで私はまたしても自分の至らなさを痛感しました。私は2週間APSARAに従事して、公団への利益になるであろう活動や行為ばかりを考えていました。しかし、長官に対してそうした発言をしてみて、全くの間違いであることが分かりました。APSARAは自分たちの利益よりも先に、自然環境はもちろんのこと、最も重要なこととして現地に住む人々がどうやって社会に参加していけるのか、ということを第一に考えていました。こうした視点はこれまでの私の中にはなかったものであり、そしてこれこそこれからの国際社会を生きていく上で大切にしていかななくてはならない考え方なのだと実感しました。日本とは全く違った感性を持つ国に出て、そしてうまくやっていくためにどうしていくべきなのか、そういったことを私はこのインターンシップで学ぶことができたと思い

ます。

最後に、こうした素晴らしい体験の機会を与えてくださった塚脇教授、カンボジアで私たちの生活の面倒を見てくださった粕谷教授、そして個人的に何度もご迷惑をかけ続けてしまった深沢教授へ心から感謝を述べたいと思います。

[自由エッセー]

カンボジアでのインターンシップを終えて

金沢大学人間社会学域人文学類フィールド文化学コース3年

畑 初音（第3グループ）

今回のインターンシップでは、アンコール遺跡整備公団（APSARA）の業務に従事して、その目的や重要性を理解することに加え、表面的に調べるだけでは触れることのできなかったカンボジアという国を、実際に体感することができた。人々、遺跡、食べ物、宗教など、様々な感じたことはあるが、その中でも特に印象深かったことを述べたいと思う。

アンコール遺跡公園内はどこを見ても遺跡があり、目に入ってくる情報が飽和状態で、慣れるまですりやがて時間がかかった。業務中に見学させていただいた遺跡や寺院の他、休日に出かけたアンコール・ワットはもちろんすばらしく、カンボジアの象徴たるにふさわしい壮大さを持っていた。これらの遺跡は、その場に立って雰囲気味わうのも楽しいものであるし、その建築理念や歴史を交えて見るのも楽しい。その点で、業務中に現地の考古学者の方に遺跡について説明をいただける機会があったのは大変嬉しかった。構造や部材の特徴、モチーフの意味などについて説明をしてくださったのだが、その中である部材について、「この部材は本来あそこにあるべきなのに、修復の際に間違ってここにおいてしまったものだ」と仰ったのに驚いた。

世界遺産として多くの観光客を受け入れるアンコール遺跡は、もちろん適切な修復や保護、整備が必要となるだろう。しかし、世界遺産でさえ間違っただけ修復という問題が起こり得るのだということを知り、あらためて修復の効果と問題点を目の当たりにすることができた。

また、現地の人と私たち日本人との考え方や見方の違いというのも大変おもしろく感じた。日本を訪れたことのある公団の方が、その時に撮った写真を見せてくれたのだが、金沢大学や兼六園の写真に混じって、高層ビルや電車の写真が多いことに気がついた。確かにシェムリアプでは高い建物はあまり見かけず、カンボジアの人にとっては新鮮なのだろう。しかし群を抜いて多いのは雪の写真である。カンボジアに雪は降らず、日本での初めての雪遊びが楽しかったのだと話してくれた。

私がカンボジアで撮った写真はというと、遺跡と寺院と空の写真がほとんどである。業務で訪れ



アンコール・トム



車窓から

ていた場所は、高い建物や電線どころか山もないので空が広い。何もなく、ただ空だけがあるという景色が新鮮で、たくさん撮ったのである。おそらくカンボジアの人にとっては見慣れた風景なのだろうが、日本にはない解放感が確かにあった。しかし食べ物の写真を撮るのは、カンボジア人も日本人も同じであるようだ。

インターンシップに参加する以前の私のカンボジアに対するイメージは、必ずしも良いものばかりではなかった。すばらしい世界遺産であるアンコール・ワットがあり、観光客が多く訪れるという点や、塚脇先生のお話、また事前学習により、何となく現在のカンボジアを思い描くことができるようになったものの、特にその歴史からくる暗いイメージは拭い切れなかった。

実際は、私たちの過ごしたシェムリアプ市は昼も夜も明るく、マーケットも賑やかであった。人々も親切で明朗であり、治安の心配はほとんどせずとも良かったほどである。

しかし都市部を外れると、片足が義足の人や、地雷被害者の楽団で楽器を演奏する人を見かける。都市部が明るく豊かであるだけに、このような側面を目にするとドキリとした。見えにくくはなかったが、爪痕は確かに残っている。APSARA の業務に携わり、多くの遺跡や寺院を訪れたり、休日はのんびり買い物をするといった充実した日々の中に、閃くようにところどころに入り込んでいるこれらの記憶は、何よりも忘れがたく、また忘れてはいけないと思うのである。

このような人々を含め、アンコール遺跡公園内には多くの人々がごく普通に生活している。アンコール遺跡は、カンボジアの歴史を内包した文化財であり、世界遺産という観光資源であり、人々の生活の場でもある。人の住む世界遺産というアンコール遺跡の特殊性は、このような多面性をもつことだと私は考えている。

APSARA の業務は主に遺跡公園内で行われるが、それは遺跡を修復・保護し、観光客向けに整備することだけを目的としたものではなく、むしろ遺跡公園内で生活する人々のための活動としての比重が大きいのではないかと思う。APSARA は私の考える多面性それぞれのバランスを非常にうまく調整している。各地にある世界遺産では、観光客が増えることで起こる遺跡破壊や環境の悪化、現地に住む人々と観光客との折り合いが問題になっている場所も少なくない。そのようなところでは、それらの調整をはかる APSARA のような活動は今後ますます重要になるだろうと感じた。

また、APSARA の活動内容は環境整備や遺跡の保護、観光客向けの施設の整備など多岐に渡るため、これらの活動を行う上では複数の分野間の協力や、多面的なものごとを見る視点が不可欠である。業務の中で、また今後の大学生活の中で、そうした視点を養っていききたいと感じた。

このインターンシップは私にとって単なる就業体験ではなく、またいたずらに楽しいだけの思い出でもない。日本にいては見ることはできなかった様々なものを見ることができた。それらの持つ意味は必ずしも具体的ではなく、時には感性が試されているように思われる部分もあった。しかし、2週間という短い期間ながらカンボジアで生活し、APSARA で働くことができたことは、私が今後ものごとを考える上で、その考え方や視点に何かしらの影響を与えるだろうと思う。

このインターンシップは国際学類主催のものであったが、このような機会の、全学生に向けての広い受け入れは大変貴重であり、私も他学類ながら参加できたことを嬉しく思う。この企画の実現と成功のためにご尽力くださったアンコール遺跡整備公団の方々、金沢大学の先生方に心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

[自由エッセー]

カンボジアでの二週間

金沢大学人間社会学域国際学類国際社会コース2年

畠中 瞳（第4グループ）

この貴重なインターンシップに参加させてもらえたことを心より嬉しく思います。二週間という短い間ながらたくさんのことを経験し、実感し、考えさせられました。今後もこのインターンシップが続いて多くの後輩が私たちと同じような体験を是非してほしいと思います。

私がこのインターンシップに参加しようと思った理由は、いくつかあるのですが、アンコール・インターンシップの参加者募集の掲示を見た瞬間直感的には行くことを決めていました。勢いで参加した私でしたが、良い人ばかりの他のメンバーや先生方の心強いサポートのおかげで本当に素晴らしい時間を過ごすことができました。

ここではカンボジアでの二週間で私がいかによく学び、よく食べ、よく楽しんできたかをお伝えしたいと思います。

カンボジアは予想以上に快適でした。カンボジアに行くまでは発展途上というイメージから、現地の生活に対して少し不安がありました。ですが、カンボジアに到着して始めに訪れたスーパーマーケットのあるショッピングモールに着いた瞬間、清潔感があり、日本のものとも劣らない広さを目にして、私の不安はなくなりました。特に食べ物は文句なしでした。街にはさまざまな料理のお店が並んでおり、中華やフランス料理など、さまざまな料理を食べることができました。お洒落なカフェが並ぶパブストリートでは、二週間で何度も食べるほどに気に入ったアイスクリームにも出会えることができ、今でもたまに思い出してしまうほど大好きになりました。ほかにも美味しい料理がたくさんあり、私は二週間元気に過ごすことができました。



二週間で私はたくさんの人と出会いました。APSARA の職員の人たちは私たちに本当に親切で、優しく、親しみやすく、のおかげで毎日の仕事を楽しむことができました。始めのうちはお互いの英語がうまく通じあわないということがありましたが、慣れてくると自然と会話できていました。昼休みにはみんなで昼寝をし、作業が終わると遺跡に連れていってくれ、カンボジア語を教えてもらったり、日本語を教えたり、作業中もそれ以外の時間も楽しすぎて日本に帰る時は本当に悲しかったです。出会った人は APSARA の職員だけではなく、街でもたくさんの出会いがありました。二週

間滞在していると、いつも同じ場所にいるトゥクトゥクの運転手さんも始めのうちはトゥクトゥクに乗らないか、と誘っていたのが数日経つと今日何するの？とか調子どう？といった会話になっていました。現地の人々はとても暖かく、私たちの顔をすぐに覚えてくれて道を歩くだけでたくさんの人に声をかけられることもありました。そのおかげで現地にすぐに馴染むこともでき、新しい人との出会いは素敵だな、としみじみと感じました。



インターンシップの1週間はエコヴィレッジである Run Ta-Ek のグループ、2週間は水質・大気の汚染調査のグループに配属させていただきました。一番難しいと感じたことは、1週目のエコヴィレッジについての質問でした。近代的な生活や街中から離れて郊外へ出て農業をしながら伝統的な生活をするために移り住むことを考えると、計画自体の発想はいいと思えたのですが、それが日本だと日本人は果たして計画に参加したがるのだろうか自分たちの考えは日本がベースになっているために難しい質問でした。同時に、あらためて日本では近代的な生活が当たり前になっているのだな、と改めて実感することができました。

カンボジアでの2週間で私はこの国が大好きになりました。現地にいる APSARA 職員のみなさんに会うため、完成した Run Ta-Ek の村々を訪れるため、大好きなアイスクリームを食べるためにまたカンボジアに行きたいと思います。



[自由エッセー]

—誇りをもって—

金沢大学人間社会学域国際学類国際社会コース3年

廣田凜々子（第4グループ）

あの夏の出来事。私にとって、毎日が眩しくて新しい経験だった。もう3カ月も前の思い出になってしまったけれど、目を閉じればすぐそこにあの時の気温や街の音、人々の笑顔、たくさんの記憶がよみがえる。

2010年9月4日、朝の3時に金沢を出発。私は松島智子さんのお宅にお邪魔して睡魔と闘いながらその時を待った。バスに乗った後の記憶はほとんどなく、関西空港に着いたのは8時30分頃。天気は晴れで、空港へ続く橋から見えた真っ青な海と空はとてもきれいだった。たった5時間のフライトだったけど、とてつもなく長く感じられた。現地時間20時頃によくシェムリアプに到着し、30分後にはホテルにチェックイン。明日の朝食を調達するために近くのショッピングモールに連れて行ってもらい、ホテルへ戻った後は疲れのせいか何だかわからないうちに寝てしまっていた。翌朝、はっと目が覚めた時、窓辺まで一気に走りカーテンを思いっきり開いた。そして「カンボジアだ——！！」と叫んだのを覚えている。空気も音も風景も、目に映るすべてのものが初めてで、私は確かに見知らぬ土地、カンボジアに突っ立っていた。

この日は朝から全員でアンコール遺跡に向かった。大型の車にぎゅうぎゅうに乗り込み、塚脇先生の説明を耳で聞きながら目は窓の外にくぎ付け。私にとって人生初の海外だった。当たり前だけど、明らかに日本とは違う。建物も、植物も、人も、空も、太陽も！ 私は楽しみでいっぱいになった。しかし、私はあの日何度「暑い！」と口にしたらろう。緯度の低い国にいることをひしひしと実感したのだった。遺跡はもちろん素晴らしいのだが、あまりの暑さに体力を奪われてしまった私は、実はあの時、早く昼食にならないかなと思っていた。午後は買い物に出かけ、夜はホテル近くのタイ料理店で全員そろっての夕食をいただいた。この日は昼食と夕食をレストランでいただいたが、想像していたよりもはるかに美味しく、塚脇先生には「太る宣言」をされてしまった。夕食後はNight Marketという観光客向けの大きなお土産市場へ行くことに。このNight Market、とてもにぎやかで明るく、そこにいるだけでわくわくするようなところだった。長い夜もようやく終わり、ついに明日から本題であるインターンシップが始まる。

インターン初日から大慌ての私。なんと集合時間を30分間違えていて、部屋でのんびり歯磨きをしていたところに昨日買った携帯電話にさっそく着信が。「もうみんなロビーに集まっています！」その電話をしてくれたのが、この先一緒に行動することになる相方、畠中瞳さん。学年が1つ上の私としては、なんとも恥ずかしい出来事だった。頼りになる先輩という目標は初っ端から断念せざるを得ず、この瞬間から私は「仲のいいグループ」を目指すことになる。

ホテルから車で約15分のところにAPSARAのオフィスはあった。スタートを見事に失敗した私は、朝からボサボサの状態でおフィス内へ突入した。想像していたよりも大きなオフィス、たくさんの職員の方々。日本人13人はボツンと小さく見えた。公団の制服を着た日本の学生は、たくさんの視線を浴びながら立派な会議室へと通された。ずらりと並んだ公団のみなさんに緊張しながら、受け入れの挨拶が始まった。自己紹介では自分でも何を言っているのかわからないほど英語がしゃべれず、そして聞き取れず、この先やっていけるのかという不安でいっぱいになってしまった。そ

んな焦りを抱いたまま、お昼休憩をとるために一旦ホテルへ戻るメンバー。私は気合いを入れ直すために髪をひとつに結んで、今度こそ集合時間を間違えずに午後出勤に備えた。その時に、私はやっとスタート地点に立つことができた。これから始まる最高の日々を、私はまだ予測できていない。

第1週目は、Run Ta-Ek eco-village というプロジェクトに携わらせていただいた。カンボジアの伝統的な生活を再現することで、エコで持続可能な村をつくろうというプロジェクトだ。ここでは自給自足の生活について学び、自然のもつ力や、人々の知恵を体感することができた。この1週間はカンボジアという国に近く触れられた週になったと思う。勤務外の時間に公団の方が遺跡に連れていってくださり、現地の人々と触れ合ったり食事をしたりと、毎日が充実していた。遺跡は信じられないほど美しく壮大で、感動の連続だった。そして、あんなに嫌だった太陽も全く苦に感じなくなるという、それほど刺激的な毎日だった。人々の優しさや笑顔に元気づけられて、疲れも忘れてしまう。私たちが毎日言っていたクメール語、「Sabay nas !」は「happy so much !」という意味。

いつの間にか私たちは「よく食べるグループ」と命名されていた。名付け親はもちろん塚脇先生。完全に否定することは残念ながらできないが、私の目標通り「仲のいいグループ」にもなったと思う。畠中さんとは学類もコースも一緒だったのに、このインターンシップに参加するまで話したこともなかった。そんな彼女と一緒に過ごし、笑って、困った、食べて、食べて、私はいつも元気をもらっていたと思う。頼りになる先輩は初日にあきらめていたので、仲のいい友達として、毎日助けてもらった。ありがとう。

「よく食べるグループ」は2週目、水質汚染と大気汚染に関するプロジェクトに携わった。1週目とは違って、内容を把握しやすい仕事内容だった。なかでも1番印象に残ったのは3日目の業務。この日は街の中心地にあるバゴダにて大気汚染観測・交通量チェック・街角インタビューを行った。交通量チェックは手書きで行うという地味な作業だったが、その交通量の多さに驚きも感じた。中でも、インタビューの時にはとても大切なことを学ぶことができた。インタビューでは事前に内容を考えて、それを地元の人たちに聞いてみるというものだった。私は「大気汚染の主な原因は何だと思いますか？」というありふれた質問を考えてきたのだが、多くの人が「車やバイクの排気ガス」「産業・工業からの汚染」と答える中、ある1人の学生が「人々の無関心さ」と答えたのが非常に印象的だった。何かを変えたり改善したりするために、最も重要なことを気づかされた気がした。

たった2週間ではあったが、信じられないほど楽しい毎日だった。公団の皆さんともすぐに仲良くなり、いつも笑ってばかりだった。一緒にクメール語と日本語を交互に勉強しあったり、ハンモックで昼寝をしたり、ゲームをしたり。普通のインターンシップではありえない、「友達」のような関係を築くことができたように思う。日本に帰ってからメール等で交流は続いており、時間以上のものを得ることができた。

APSARA の皆さん、その他の多くの方々のおかげで素晴らしい時間を過ごすことができ、私は本当に幸せでラッキーだと思う。異なる国の人々と触れ合う楽しさ、喜び、「初めて」の連続の中で見つけたかけがえのない思い出、出会い。カンボジアで自分が何の役に立ったのか、何ができただのかはわからないけれど、私は APSARA の皆さんとこの国に、心から感謝したい。

また、今回のインターンシップでは、自分たちの仕事や APSARA 公団に強い誇りをもち、そして仲間を大切にされている職員の方々の様子を見て、素敵な職場だということがまっすぐに伝わり、職場に対するあこがれのようなものを抱いた。APSARA 公団の役割、必要性、重要性を、少しではあるが学べたことはもちろん収穫ではあったが、私はこの2週間でカンボジアという国、そしてそ

ここに住む人々と触れ合うことで価値観や世界観が変わり、視野を広げられたこともまた大きな成果だと思う。本当に素晴らしい経験をさせていただき、今も感謝の気持ちでいっぱいである。私はあの夏をカンボジアで過ごしたことを、120%の自信をもって「よかった」と言いたい。

日本に暮らしている多くの人たちがそうであるように自分にとっても「カンボジア」という国はあまり親しみのない名前の国でした。もちろん、少し時間をかければアンコールワット寺院のことや同じアジアにある熱帯の国だということ、途上国でかつては内乱もあり、日本とはいろんな意味で対照的な国だということは思い浮かんできました。しかし、それ以上何を知っているかといわれると返答には詰まります。アンコール寺院そのものについてもほとんど何も知らなかったし、町のつくりや生活体系もよく分かっていませんでした。この研修に参加した理由は自分自身今まで一度も同じアジアの国や途上国に行った経験がなく、そのようではこのグローバル化の時代を生き抜くのは難しいだろうし、「途上国とはどういうものか」といったことを実際に肌で感じてみたいとも思ったからです。渡航前には数回の説明会がありましたが、今回が研修第一回目ということもあり残念ながら最後まで明確なイメージを描くことはできず渡航の日を迎えました。しかしながら、幸運にもその“情報が少ない”ということが利点として働き、現地に着いてからは目につくものすべてが新鮮な事に映りました。気候に関して日本と違ったのは日差しは強く鋭く、乾いて少し埃っぽい空気、雨は急に降りだしてすぐに止むという感じでした。一回当たりに多くの水量が降りますが、一日の大半は晴れていて比較的長い時間にわたりパラパラと降り続ける日本の雨とは対照的だと感じました。実際に体験してみるとトータルでは日本と降水量が違わないということも納得です。また、住民のほとんどが物品の販売や飲食店、あるいはバイクで人の運搬のような観光客むけの仕事をしていました。一般的に日本人のイメージするような工場や事務所に勤めるような“仕事”をしている人は少なかったように思います。加えて、観光都市のためかほとんどすべての人が英語を話すことができ、小学生くらいの子供でさえ流暢な英語を話せることには驚きました。少なくとも日本では考えにくいような光景だと思います。治安は想像していたよりはずっと良く、他の外国と同じように常識の範囲内で行動すれば大きな問題に直面することはないと思います。さらに驚いたのは、欧州の国とは違いどの店も連日営業していたことと、コンビニのように夜遅くまで開いている雑貨店のような店もあったことです。日用品は安価ですぐに手に入るので生活していて不便だと感じることはほとんどありませんでした。キリスト教的な文化よりも東洋的な文化の流れを受けていることを感じ取れました。また、路線バスや電車といった決められたルートを予定通りの時刻に運行する公共の交通機関も見受けられなかったことにも少し驚きました。現状で彼らにとっては必要のないシステムなのかもしれません。下水も整備されておらず、不純物の多いガソリンを使っていることなど衛生面での改善は明らかに必要ですが、電気やガスが完備されていない生活の中でも皆とくべつ不自由を感じているようには見えませんでした。我々にとっては当たり前なものも他の国にとってはそうとは限りません。そのような道具であったりシステムであったりは、その形そのままが機械的に受け入れられていくわけではなくその土地に応じ必要なものだけがそれぞれに合った形で順応していくのかもしれないと思いました。このようにして実際に現地を訪れたことによって、今まで自分の中にあった勝手なイメージはよりリアルなものへと書きかえていくことができました。

次に、取り組んだ二つの事業について説明します。一週目に取り組んだ北バライ周辺地域のプロ

プロジェクトでは水利用について学びました。古くに作られたが今は使われていない北バライ貯水池を復興、現代風に改良し水資源を有効的に利用するというのがこのプロジェクトの最大の目標です。加えて、貯水池の周辺に植物を植えて整備し遊歩道を作るという計画も現在進行中です。水資源の安定化は本質的に二つの問題点を解決しています。乾期の水不足については書籍やメディアの報道から想像が容易ですが、雨季に水が氾濫し文化的価値の高い遺跡に損害を与えてしまっていること、住民の生活にも大きな影響があることなども深刻な問題となっています。貯水池を復元することでこの二つを同時に防ぐことができるのです。また雨季の増水時であちこちにあふれた水の残りが各地に小さな水たまりになって散乱しています。個々の水たまりはごく小さく生活や農業に利用できるほどのものではありませんが、無数の小さなその水たまりの水を一か所に集めることができればさまざまな事に利用できます。水の流れをコントロールすることでそのような水たまりがあらかじめできないよう防ぎ、生活や農作業に利用できるようにするというのも貯水池を作るもう一つの理由となっています。

二週目に携わったルンタエク地域のプロジェクトの一番の目的は人口増加によってスラム街化しつつあるいくつかの地域の住民の移住先として、村を建築することです。ゆくゆくは病院や学校も建て将来的には一種のコミュニティーのようなものになると思われます。そこに建てる家々は昔ながらのクメール方式のものを採用しており、そこに環境に配慮した様々なシステムを付加することで観光客だけでなく近隣民の関心を惹くことも意識されています。また、町の中心にあるため池から住民の生活用水を補うとのことですが、湖面は神秘的な色合いをしていて観光客の気を惹くには十分だと思います。最後に業務を終えた上で、改めて自分がこの国に抱いている印象を書きます。中国に代表されるように多くの途上国は近年目覚ましい速度で発展していますが、一方で周りの環境を顧みない開発などが問題視されています。また、国益を化石燃料や鉱物の輸出額に多く依存している国もありますが、それらはいずれ枯渇してしまいます。こういった国と比較するとカンボジアは決して速くはないけれど着実に成長の一途をたどり、さらには自然との共生までも実現している数少ない国だと思います。観光産業は半永久的に続けられるので経済面での心配も比較的少なく思われます。こうして振り返ってみると、一見すれば今後の生活や日本の就業では疎遠に感じるような事からも学ぶべきことをくみ取ることができ、非常に実りあるインターンシップだったと感じます。



私がこのインターンシップに参加した主な理由は、世界遺産を支えている裏側の仕事を見てみたいと思ったことと、1年時にカンボジアを訪れたことがあり個人的にカンボジアという国にとっても興味をもっていたことです。また、外国で仕事を経験するという機会はめったにないし、非常に貴重な経験だと思うので、その意味でも非常に魅力的なインターンだと感じ、ぜひ参加したいと思いました。

現地に実際に行ってみると、APSARA 公団がアンコール遺跡群、またその周辺地域にどれだけ大きな貢献をしているかということが、いたるところで感じられました。例えば観光客に最も身近なところでは、遺跡の入り口や中にいくつか置いてあるごみ箱や、木の名前が書いてあるプレートに APSARA 公団のマークが入っていました。ごみ箱やプレートは私が2年前に訪れた時にもあったと思いますが、その時は誰がこれらを管理しているのかということなど考えもしませんでした。

公団の職員はカンボジア人ですが、彼らの多くは流暢に英語を話し、彼らのプロジェクトを説明してくれました。彼らとのコミュニケーションはすべて英語だったため、自分の英語力の低さに落胆しました。しかも彼らは英語よりもフランス語のほうがうまく話せるらしいということで、たいへん驚きました。また、仕事の合間に聞いた話では、カンボジアの人はたいてい、大学で勉強したいと思ったらまず仕事を探して、その稼いだお金で大学に行って勉強するのだそうで、実際朝から夕方まで働いて夜大学で勉強しているという若い職員とも話をしました。彼らの学ぶ姿勢を知り、日本人との差を感じました。これらの経験から、自分の勉強に対する姿勢を見直すことができ、学習、特に英語の学習に力を入れて取り組もうという意欲を持つことができました。

インターン先の職場からは、彼らが自分たちの仕事に誇りを持って取り組んでいるということを感じました。実際に彼らの仕事を、一部かもしれませんが見学したり一緒に作業したりして、働いている人はみな大学卒、または在学中のエリートであり、その仕事内容も遺跡、またその周りの環境（水、大気など）の調査やそれに基づく改善計画などが主で、実際に植物を育てたり水路を掘ったりするのは彼らに雇われた地元の人たちであるということを考えると、彼らの仕事というのはたくさんの人を動かして世界遺産を管理するという大きな仕事であるから、誇りを持つのも自然なことだと思いました。また、計画中のプロジェクトの内容やそのやりかたについて説明を受けましたが、その計画から彼らが自然をととても大切に思っているということも感じました。例えば、アンコール遺跡群には世界中から非常に多くの観光客が訪れ、そのため人が特に多く集まるアンコールワットなどの付近は大気汚染が進んでいます。その観光客の密集を和らげようと新たにカンボジアの植物（花が咲く木）を見ることが出来る散歩道のようなものを作る計画があるのですが、もともとある細い道を、両側にある木を切ることなくそのまま使いたい、ただ観賞用に道の両側に植物を並べて植えるのではなく、自然に生えているような感じで今ある木の間に植えていきたい、カンボジアのオリジナルの植物を知ってもらいたいので、いい匂いのする花も、いい匂いでない花も植える、など、自然に対する彼らのこだわりを知ることができました。

もう1つ職場に関して感じたことは、職員の仲の良さでした。私たちの受け入れ先は水・資源部

門で20代～30代の割と若い男性が多い職場だったのですが、日本のような年齢による上下関係はあまり感じず、みんな楽しそうに仲良く仕事をしている姿がとても印象的でした。

このAPSARAへのインターンシップは今回が初めてということで、公団の人たちも非常によくしてくださり、様々なことを丁寧に説明してくださいました。それ自体はとても嬉しかったのですが、アンコール遺跡の歴史や神話についてなどをもっと勉強して知識として持っておくべきだったというのが反省点です。インターンシップにあたっては事前講座でカンボジアの歴史、言語、気候、食べ物などについて各自調べたことを発表してその知識を共有し、おおまかに全体を把握して行っただけなのですが、それでは足りなかったなと感じました。また個人的にはせめてもう少し英語に慣れておくべきだったというのも反省点です。もともと相手もネイティブではないのでそのなまりに慣れるのに時間がかかるにも関わらず、出発するまでの間に英語に触れる機会がほとんどなかったため、急に英語でのコミュニケーションになったときに、特にインターン初日の初め数時間は相手が何を言っているのかほとんどわからず、相手を若干当惑させてしまい、苦い思いをしました。

金沢大学がこの公団に協力していることは今まで知らなかったもので、水質検査の際に使用する機械と試薬セットが金沢大学からのもので、機械の表示がすべて日本語なのでその使い方や検査の手順などをクメール語と英語で書いた紙があり、それを見ながら検査をしている様子を見て驚きました。私が知らなかっただけで、この公団と金沢大学の関係は以前からあったのだということがわかって嬉しくなりました。

今回このインターンシップに参加して、普通なら絶対にできないような経験をたくさんさせてもらいました。貴重な体験をさせてくださった、このインターンにかかわったすべての方に感謝したいと思います。

1. カンボジアという国

最初家族にカンボジアでインターンシップをしてくると話した時は、「カンボジアって危険な国じゃないのか」と聞かれました。私自身、カンボジアと聞いて始めに思いつくのは、国連カンボジア暫定機構(UNTAC)のある国で、未だに地雷の残っている国といったイメージであったり、ベトナム戦争の拡大によって危険にさらされた国であるといったイメージであったり、ポルポト政権による大虐殺の行われた国といったイメージでした。だから私自身、安全なのか少し不安でしたが、カンボジアによく行っておられる塚脇先生が安全なところだとおっしゃっていたので、それを伝えたと、家族も安心してくれました。

実際カンボジアに二週間行って感じたことは、カンボジアは、たしかに現在二十歳の私が幼小だった当時は危険な国で、カンボジア人の中には親族を殺された人も多くいるという暗い歴史をもつ国だけれど、現在のカンボジアは、私が自由に町を歩いても全く危険は感じないし、イメージとは対照的に、今から発展を進め、カンボジアをよりよい国にしようというやる気のある青年や技術者が多く、活気のある国だと感じました。また、子供たちが外で物売りをしながらみんなで遊んでいる様子は、家の中でゲームで遊んでいる現在の日本の子供たちよりもよっぽど楽しそうに見えました。

また、カンボジア人は子供も大人も日本人よりも社交的で、かつ友好的だと感じました。日本人をみかけると、知らない人でも片言の日本語で話しかけてきます。そして同じ道をよく通ると、トゥクトゥクの運転手の人に顔を覚えられて仲良くなることもあります。このような経験は日本ではあまり経験したことのないものでした。日本で知らない人に話しかけられたら、キャッチかティッシュ配りのか、ナンパか変な人かと思って注意しますよね。カンボジアでは人間の温かみを教えられた気がします。

ここまで何が言いたかったのかまとめると、カンボジアは日本人のイメージよりもとてもいいところです。日本人はアンコールワットなどの世界遺産を見に多くカンボジアを訪れているはずですが、短期間のツアー旅行ではそこまで分からないかもしれないので、のんびりカンボジアなどの途上国に滞在してみるのもいいと思います。

2. カンボジアでの生活

私は自分でもカンボジアでの生活を十分に満喫した自信があります。カンボジアの物価はだいたい日本の半分くらいなので、結構贅沢な暮しができました。泊ったホテルは、すごく安いのに一人一部屋で、ベッドも部屋も広くて十分でした。また、ホテルの徒歩圏内にはコンビニやショッピングセンターやオールドマーケットやナイトマーケットなど地元の人や観光客向けの店がたくさんありました。特にナイトマーケットはその名の通り夜にやっているのですごくオシャレで観光客にも人気のスポットでよく行っておみやげを買いました。

また、何よりも現地で重要なのは、食事です。基本的に食事は自由だったので、いろいろな場所で食べました。その中で私たち二年生三人組が一番はまったのは、右の写真にある「タイすき」の

お店です。すごくヘルシーでお腹の調子が良くない時や
あっさり済ませたい時にはぴったりでした。また、少し歩
くとパブストリートというこれまたオシャレなお店がずら
りと立ち並ぶ場所があって、ここもすごくお勧めの場所
です。

疲れた日には1時間5ドルくらいのマッサージをしに行
くことも多かったんです。毎日の業務は私的に結構疲れたの
で、マッサージをすると次の日が楽でした。このように、
カンボジアでは日本にいる時と同じくらい、もしくはそれ以上に贅沢な生活ができました。



3. アプサラ公団でのインターンシップ

私たちは2週間、アプサラというアンコール遺跡管理公団でインターンシップを行いました。こ
れは金沢大学にとって初めての海外でのインターンシップ事業で、先生も私たち参加者も公団の
人々もお互いに手探りの事業でした。けれども結果的にすごく楽しいインターンシップになって本
当によかったと思います。

初めてアプサラの本部に行った日の午前中に式典をした時は、英語の聞き取れなさに、自分のこ
んな英語力で十分に仕事ができるのか心配に思ったのと、式典で自己紹介と一言を順番に言った時
それだけでも緊張したのを覚えています。また、その後グループに分かれて打ち合わせをしたので
すが、カンボジア独特の英語のイントネーションを初めて聞いたので、担当の人が何をすると
言っているのかがあまり理解できなくて、午後からの業務をととても不安に感じました。

しかし、実際仕事をしてみると、アプサラの職員みんなはとても親身になって教えてくれ、す
ぐに仲良くなることができました。ユーモアのある人が多かったんです。日本から来て何も知らない
私たちに、彼らの仕事を実際に野外に出て教えてもらうことが多かったんです。

だから、私が彼らのために特に何をできたのかはよく分からないけれど、私が新たに知り、学ん
だことはたくさんあります。具体的には、アンコール遺跡における水管理の重要性、発展途上国に
おける水管理の方法や水の重要性、遺跡と住民との共存を支える人々の努力等です。また、途上国
において、シェムリアプのような観光客の急激な増加に耐えるには、どのようなまちづくりをすれ
ばいいのかについて考えてみたいと思いました。もともと私はアジアコースで、アジアについて興
味があったのですが、このインターンシップで、特に東南アジアの途上国についての興味がわきま
した。できればまたカンボジアを筆頭に、アジアの途上国に行きたいと思いました。

[自由エッセー]

アンコールワットインターンシップに参加して

金沢大学自然科学研究科生物科学専攻 M1

森井 香 (第5グループ)

このインターンシップは、以前から世界遺産として有名なカンボジアのアンコール遺跡に興味があり、今回はインターンということで通常は携わることの出来ないアンコール遺跡の保全活動も行える点に魅力を感じ、志望しました。カンボジアについては、観光地として有名な一方で、内戦の影響で地雷が多く存在している国というイメージが個人的にはあり、終戦後20年近く経った現在のカンボジアを知りたいと思ったことも志望動機のひとつです。APSARAはカンボジア最大の公団ということもあり、このインターンを通し今のカンボジアの様子や、遺跡保存のためにAPSARAがどのような活動を行っているかを知りたいと思い、参加する直前まで事前学習に取り組みました。

事前学習としては、インターンシップ参加者が週に一度集まり行われた事前学習会が数回あり、実際にインターンへ参加する前に参加者がそれぞれ興味のある分野について調べ、発表を行いました。私は教育制度について調べたのですが、この学習会があったおかげで実際にカンボジアへ行く前に文化や歴史を知ることができ、インターンの業務内容についても理解が深まったと感じました。他には、カンボジアに滞在したことのある知人に話を聞くなどして、事前に現地の気候や治安を調べてから参加しました。振り返ってみると、実際に現地へ行ってみなければ分からないことも多かったのですが、事前学習をしていたからこそ分かる部分もあり、事前学習をして良かったと思いました。

現地では、APSARA公団の水質管理部門という30名ほど職員の方がいらっしゃる部署でお世話になりました。和気藹々とした雰囲気の中で毎日、楽しそうに仕事へ取り組んでいる姿が印象的で、数人のグループに別れ、広範囲で業務を行うため、頻繁に携帯電話で連絡を取り合っている点も、団結力がある職場だから行えると思いました。インターン初日は、アンコールワット周辺の灌漑設備の改善や、観光客向けの開発計画なども教えていただいたのですが、アジアではなく欧米からの観光客向けに道を整備する計画を立てているようで、カンボジアの経済を担う観光産業への力の入れ方がすごいと思いました。カンボジアのなかでもシェムリアプは観光地化されている地域ということで、日本の観光地でも度々問題となっているゴミによる環境汚染があるのではないかと予想していたのですが、実際に現地へ行ってみると、観光客の出すゴミや、アンコールワットで生活している人々の生活ゴミを回収するシステムがまだ確立されておらず、道端でゴミを焼いている場面を目にしました。職員の方によると、環境保護のためにも何とかしたいそうなのですが、現状としては生ごみを回収し堆肥にするシステムを、アンコールワットに住んでいる人々に普及させている段階だとわかりました。

また、今回のインターンシップでは国際機関で働くとはどのようなことか体験したことで、日本ではほぼ感じられない英語の必要性を実感する機会にもなりました。それと同時に、職員の方々が忙しい中大変親切に対応してくださり、カンボジアの方々の親切な国民性を垣間見えました。インターンシップ以外では、休日出かけた商店街で中学生ぐらいの年齢の子供達が地方から出稼ぎのために働いており、店番をしているため学校に通えていない、という話を聞きました。事前学習で教育について調べたときは、法律によって中学校まで義務教育となっていると定められて

いたのですが、実際には家庭の経済状況によって学校へ通えない子供達がいるという現実を目の当たりにし、家庭の経済状況に左右されず、すべての子供達に教育の機会が平等に与えられる環境が早く整うためには何が必要なのか、考えさせられました。

治安などもインターンに参加する前は少し心配していたのですが、実際行ってみると塚脇先生が治安のいい場所のホテルを選んで借りてくださり、職員の方々が送迎して下さったおかげで、特にスリや危険な目に会うこともなく2週間を過ごすことができました。

全体を通して、ありきたりかもしれませんがインターンシップに参加したことで英語や他の言語に対する学習意欲、というよりも危機感を抱いたように思いました。また、カンボジアについても関心が高まり、ニュースなどでカンボジア関連の話題が取り上げら得ていると、以前よりも興味を持って観るようになりました。今回が初のアンコールワットへのインターンということで、引率の先生方が何かと手探り状態で忙しそうな印象を受けましたが、個人的には大変為になるインターンで、参加して良かったと思いました。旅費としては国内のインターンよりも掛かったのですが、一部交通費の補助が降りたため多少負担が少なくなり良かったです。日程的にも丁度良く、気候としても過ごしやすくいい時期だと思いました。職場体験と同時に、異文化について理解を深めるきっかけにもなると感じたので、今後もぜひ、アンコールワットでのインターンシップを続けていただきたいと感じました。

インターンシップの業務内容についても、2週間同じ内容ではなく、担当の方と一緒に様々な現場を視察させて頂き、アンコールワット全体を把握するには時間が足りなかったのですが、水質管理や保全活動の一部を垣間見ることができ、有意義でした。

全体を通してお世話になった、塚脇先生、粕谷先生、そして国際学類の先生や他の関係者の方々に厚く御礼申し上げます。

2010 年アンコール遺跡整備公団インターンシップを終えて

「内向き」という言葉で批判をうけがちな今の日本の若者たちですが、国際学類から同行した教員として今回のインターン生たちを見ていて、そのようなことは全く感じませんでした。われわれの若者に内向き傾向があるとしたら、その打破は年長の者が若者たちに外への目を開き自らを伸ばす機会を与えられるかどうかにかかっていると信じます。

このインターンシップでは参加者全員が、アンコールというひとつの場所でさまざまな領域の得難い体験をし、得難い情報を得、世界に大きく視野を開くことができました。学生諸君の報告にはその喜びが満ちあふれています。国際学類の目標、狭い専門領域の中にとどまらない広い視野と見識をもち積極的行動力を持った人材を育てるという目標に見事に合致したインターンシップだったと思います。

国際学類の教員は事務方の皆さんと力を合わせ、今回のインターンシップの成功のために努力を重ねてまいりましたが、それが大きく報われたと思います。わたくし自身は語学教育に携わる者として、学生の語学力の有無がインターンシップを有意義に体験する能力に直接に関わって来ることを痛感しましたので、今後も学生側の語学力向上の努力をうながし、教員側もそれに応える体制を充実させていくよう努力いたします。

APSARA 公団は学生たちに本物の就業体験ができるよう、綿密な配慮をしてくださいました。おかげで彼等は日本の大学の学部学生として外国の公団の制服を着用し現場でインターン業務に従事するという稀有の体験ができ、同時に金沢大学の存在感を多くの人に示すことができました。

最後にあらためてこの企画を実現し、自主性を重んじながら健康面、対人面、生活面での十分な安全管理のもとにインターンシップを成功させるため、ほとんど全ての期間学生たちと共にいて学生たちを導いてくださった塚脇真二教授に深く感謝させていただきます。

金沢大学人間社会学域国際学類 粕谷 雄一

